
魔法少女リリカルなのは 不幸な転生者

妙坊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 不幸な転生者

【Nコード】

N5201M

【作者名】

妙坊

【あらすじ】

この作品は、二次創作品です。二次創作品が嫌いな方、オリジナルキャラ介入が嫌いな方「戻る」をお願いします。この作品は、処女作な為 誤字脱字等あると思います。設定変更させてもらいます。書くの下手です。それでもいいと思う方は読んで下さい。

プロローグ

プロローグ

オリジナルキャラ

転生前「田中 涼」 > たなか りょうく

転生後「アル・ロング」

涼には、生まれつき霊感があり、幽霊とも話ができる。

田中 涼 30歳

独身・一人暮らし・プチオタク・前世の記憶を持っている「アルハザードの王の時」

ある日。

猫とじゃれていたら、突然死にました。

幽体離脱に、なっていた。涼は、何が起きたのか、考えていた。

いきなり、叫び声がした。

??? 「あゝ」

涼は、声がした方を見ると。

そこには、死神が居ました。

死神が、青ざめて震えていました。

戻ると、ある意味騒ぎになってった。

パトカーや、救急車など。部屋には、自分の死体は無く、死神もいない……。

まあ、いない奴を捜すこともないかあ。

涼は、幽体なのになぜか、浮いていないことに、今頃、気づきどうやって、あの世いけばいいのか、考えさせられた。

涼は、このまま部屋にいたら不味いかと思い、公園のベンチに座り込み、この先のことを考えていた。

魂だけでも（アルハザードの記憶）誰かに、転生が受け継いでくれる人を。

転生

転生

ベンチに座り、考えていたら先程の死神が話しをしてきた。
死んだ理由教えた。

死神 「実は、死ぬはずだったのは、猫の方だったんですよ…

鎌で、攻撃したら、手元が滑ってしまい、涼さんを斬ってしまいました。」

涼 「はあ？」

涼 「あんな、殺され方したら、戻れないか。」

死神 「その事で、先程上司とお話してきました。」

死神 「その前に、質問いいですか？」

涼 「時間は、沢山あるから。」

説明等と自分が浮いて、いないことを教えて。」

涼 「質問はなに？」

死神 「まず、浮いていないのは、私が斬ってしまったからです。
予定通りでない為、天界に行く道が開いてない為です。」

死神 「質問は、もしかして、涼さん意外の魂を持っていますか？」

涼 「はい。」

死神 「なら、その魂を持って転生して下さい。」

涼 「え 魂「リリカルなのは」の世界に転生？」

死神 「いえ、転生先は涼さんの行きたい所で構いませんよ。」

死神 「あと、チートの力をあげます。これは、お詫びのつもりです。」

死神 「場所は、どこでもいいですが、アニメの世界でお願いします。」

涼さんの、魂的に転生は、確実にアニメが高いはずですよ。」

涼 「魂は、何も聞かないでもいいですか？」

死神 「上司が、涼さんのこと知っていました、私は知らないけど。」

涼 「なるほどね。」

涼 「なら、刀が使えるとこで。」

死神 「場所は？」

涼 「チートくれるならどこでもいいよ。」

死神 「なら、るろうに剣心でいいですかね？」

涼 「いいけど。」

涼 「力はどれくらい？」

死神 「最初の方は、戦いながら決めたらいいですよ。」

あと、原作ブレイクして下さい。」

死神 「涼さんは、正義の名のもとに。」

死神 「アニメの世界も、なぜかイレギュラーが発生してます。」

なので、涼さんがそれを倒して下さい。」

ブレイクにより、原作変わっても。」

ほかの人が、転生するときには原作に戻るはずですよ。」

その、きっかけを涼さんをお願いします。」

涼 「まあいいけど。」

涼 「いろいろなキャラOK？」
死神 「例えば？」

涼 「違う、アニメキャラからの力とか。」

死神 「？ ああ、チートなんだからなんでもありだよ。」

死神 「私も、忙しいから始末書でね。」

涼 「それって、自業自得でしょ。容姿とか任せろ。まあ第2の人生楽しんでくるか。」

死神 「何も言えない。」

まあ、最初の方だけは、設定を決まるまでは話し出来ます。
そのあとは、涼さんの思うようにやって下さい。」

死神 「なら転生しますね。」

涼 「おう。」

死神 「えい。」

転生先

転生先

涼 「ん！？　ここは、あれ？　なんか口に、何かついてる？」

医師 「この、赤ん坊はもう助からないかもなあ。」

涼 「え！？　まあ、転生したんだから赤ん坊からかあ。」

て！？　いきなり死にかけて感じ、じゃあ意味ないじゃん。」

死神 「涼さん、ごめんなさい。又、失敗しました。」

涼 「おいおい。」

死神 「結論から、いいですね。場所は魔法少女リリカルなのは、世界です。

でも、国がアメリカなんですよ。

チートの力は、こちらで設定しました。」

涼 「いやいや、その前に死にかてるんだけど？」

死神 「だから、こちらで設定しました。その力で、生き抜いて下さい。」

涼 「なるほどね。」

涼 「でも、頭に違和感を感じる。」

死神 「よく、気づきましたね。涼さんには、脳が2つあります。

これは、涼さんが今までであった魂と転生前の記憶を残したからです。リリカルなのはの世界だと、魔法使うときには、普通の人より早く行動できますよ。」

死神 「力は、ドラゴンボールの孫悟空のスーパーサイヤジン4この力は、そこから出ればすぐ使えます。　ナルトの世界、うちはの写輪眼を開眼するのは一歳のときです。　剣気・覇気・殺気は、

そこから出れば、すぐに使えます。

刀は、二歳になれば飛天御剣流会得に行けます。

魔法は、すぐに使えます。

今のところは、これだけあれば助かるでしょ。」

涼 「治療スキルないじゃん。」

死神 「魂の記憶から、探せば大丈夫だと上司から聞いていますよ。」

涼 「アルハザードの記憶から？ あるのか。」

涼 「魔法のランクは、どれぐらい？」

死神 「EXは、あるかと。」

涼 「さて、記憶探し魔法使って、そのまま治療しよう。」

涼 「二歳の時に、最後の力の設定を決めるでいい？」

死神 「いや、そこは涼さんに任せます。」

二歳頃に会いにきます。

それまで、生き抜いて下さい。」

涼 「とりあえず頑張ってみるよ。」

死神 「失敗ばかりで、ごめんなさい。」

本当にごめんなさい。

二歳頃までお元気で、さようなら。」

涼 「生きていたらね、さようなら。」

涼 「記憶の中で、治療系を手当たり次第。

魔力あるかぎり使いまくろう。

EXならなんとかなるだろう。」

産まれて、10ヶ月たった頃ようやく退院しました。

初め家に行くと、そこには父親しかいませんでした。
母親は、産んで2ヶ月後風邪をこじらせ死んだそうです。
今の名前「アル・ロング」

アル 「あと少しで写輪眼が開眼する。」
アル 「開眼したら刀作りと修行だな。」

治療を手当たり次第やって、その影響で退院前後ぐらいから、普通に会話ができるようになった。
周りからおかしな目で見られてます。

アル 「二歳なる迄「なのは世界」
どの辺なのか調べてないとなあ。」

転生先（後書き）

アル・ロング の設定は次辺りに書きます

開眼…修行・拾い物

開眼…修行・拾い物

アル、一歳になって写輪眼を開眼した。

魔力と身体への制御は、だいぶん慣れてきた。

新暦60年。

なのはの世界にギリギリ、最初から関与できるようになったけど。
なのはの原作、記憶が薄れてる。

アル「二歳なる迄に、刀作りしないとね。」

アル「今のうちに、錬金スキルあったはず。」

このスキルは、刀作り以外使わないつもりだし。」

アル「刀は、飛天御剣流に「修行」行くはずだから、やっぱり逆刀だな。」

それだけなら、物足りないから重さ>1t< 見た目は、軽そうに作るつもりだ。

アルの手でも、持てるようにした。」

刀作りに、2ヶ月以上掛けて納得する物ができた。

ある日。

河原で練習していた。

素振りだけ、でも鍛えられるけど、重さ>1t<だけの破壊力を見
たくなつたアル。

アル 「素振りだけだと飽きた。」

木切るのは、環境問題的に不味い。」

アルは、なにげに横にアルより3倍大きな石見つけ。

アル 「この石を、簡単に壊せるように練習しよう。」

3日たつても、石にキズ一つ、つけられなかったアル。

アル 「まあ、刀だけで叩いているだけだからね。」

アル 「なんで、キズ一つ、つかないんだあ。」

アル 「練習が足りないのか？」

アルは、真剣に悩んでいた。

死神 「お久しぶりです。 涼さん。」

アル 「あ、死神よ現れるの早くない？」

死神 「涼さんが、お困りの様子だったから。」

アル 「死神よ。今の名前は、「アル・ロング」です。」

死神 「なぜ石、壊せないの？ アルには、チートの力あるのに。」

そうです、アルは自分のチートの力のこと忘れてたんですよ。

死神 「……」

アル 「ああ」

死神 「アドバイスで、切る時に「気」を入れると、いいと思いますよ。」

死神 「二歳頃に、又きますね。」

アル 「ああ アドバイスをありがとう。」

アル 「嵐みたいな奴だなあ。」

アル 「死神の、アドバイス通りに一回やってみるか。」

……

アドバイス通りに切ると、石が粉々に崩れた。

その、粉々の石から古い本くが出てきた。

その本に、何かに封印されているように鎖がある。

練習に、疲れたアルはその本を持って、家に帰った。

その本は、前世の記憶にある王の時に使っていた「デバイス」だった。

この事に、気づくのはアル四歳になってから。

家に帰ると、綺麗な女の人がいた。

アル 「パパの彼女？」

女の人 「違うわよ。」

即答で答えがきた。

アル 「パパ、可哀想。」

ルック・ロング「パパ」 「パパは、ママ一筋だよ。」

女の人 「あら、ごちそうさま。」

ルック 「アル。」

ルック 「もうすぐ、二歳なるけど刀の修行に行くのか？」

アル 「誰か、凄い強い人知らない？」

ルック 「そのことなんだけど、この綺麗な人なんだけど。」

>>古流 飛天御剣流<< 使い手なのよ。」

アル 「本当ですか？」

女の人 「そうよ、私の名前は 比古 清十郎よ。」

アル 「嘘？」

比古 「本当よ、>飛天御剣流<教えるときは、この名前よ。

普段は「緋村 萌」です」

開眼：修行・拾い物（後書き）

キャラ紹介すぐに更新します
オリジナルキャラ設定悩み中

キャラ紹介

アル・ロング

身長 100cm 体重 20kg 髪 赤色 ロング 顔 女顔

歳 1歳

魔導師ランク なし

魔力 EX

術式 ベルカ

希少スキル 写輪眼

体術 飛天御剣流見習い

武器 逆刀(1t)

ルック・ロング

身長 185cm 体重 75kg 髪 金髪 オールバック

顔 普段 歳 28歳

アルのパパ

ハーバード大学教授

アリア・ロング

アルのママ

ハーバード大学教授

アルを産んで、2ヶ月ご風邪をこじらせ死んだ

比古 清十郎 「緋村 萌」

飛天御剣流 継承者

身長 165cm 体重 ないしょ 髪 紅色 長さは肩ぐらい

ストレート スリーサイズ 秘密 歳29歳
飛天御剣流 第8代比古 清十郎 肩書きもつ者
アリア・ロングとは大学の同級生

キャラ紹介（後書き）

今のところの設定です

飛天御剣流と学校

飛天御剣流の修行

アルは、チートの力がある為。

基本的な形、 抜刀術「居合い抜き」 と 無形の位 1週間ぐら
いで形になった。

「土龍閃」・「龍槌閃」・「双龍閃」・「信剣」・「龍巢閃」・「
飛龍閃」・「双龍閃・雷」・「龍翔閃」・「龍巻閃」 は写輪眼を
使い2日で会得した。

萌 「アルちゃん、今日はこの辺にして御飯しましょう。」

萌 「何食べたい？」

アル 「なんでもいいですよ。」

アル 「女の人の料理が、こんなに美味しいものだとは知らなかった
ですよ。」

萌 「まあ、お世辞でも嬉しいわよ。」

アル 「本当に、萌さんの手料理美味しいです。」

そんな話して、朝からの修行のことを考えながら寝たアル。

萌さんは、一回見本をするだけ。

写輪眼で、コピーしている為。

萌 「アルちゃんは、教えがいがないのよね。
いい意味で優秀なのかもね。」

「龍巻閃・旋」・「竜巻閃・枯」・「神速」・「竜巻閃・嵐」
ここまで、会得したアルは5ヶ月以上。

萌 「アルちゃん。」

アル 「はい。」

萌 「あとは、奥義なんだけど 私では教えれない。」

アル 「なぜ？」

萌 「すでに、今の状態で速さがアルちゃんの方が早いよ。」

萌 「だから、今まで通り見本見せるから。

あとで、分身使って上手く会得してね。」

アル 「いつも通り、指摘とかお願いします。」

アル 「いつも通り、指摘とかお願いします。」

萌 「多少速度を、遅くしてくれればokよ。」

「九頭龍閃」・「天翔龍閃」 会得に3日。

萌 「ありえない。」

飛天御剣流を、半年で会得するなんて。

>>アリア… ルック… は頭は良いけど 運動能力は一般人ぐ
らい<<

アルちゃんは、本当に二歳なの？ 人間なの？」

アル 「どう答えよう。」

そこに。

??? 「御二人とも、お久しぶりです。」

アルと萌は、声かけてきた人を見た。

萌 「死神まだ、生きていたのですか？」

アル 「お久しぶり。」

死神 「酷い。」

いきなり、天翔龍閃の練習相手に、させられれば、死神でもお花畑
見れましたよ。」

萌 「お向かいに、来たのかと思って。」

死神 「仕事の、間違られるのも仕方がない。
先に、話を聞い欲しかったですよ。」

萌 「う！！ で、今日は何のよう？」

なんか、蚊帳の外にいる アル・ロング。

死神 「そういえば、今日は、涼さんとお話がいやアルさんだけ？」
アル 「アルですよ。 貴方に殺された者です。」

死神 「あの時は、萌さんに切られた後なんだけど。」

死神 「だかね、罰として萌さんをイレギュラーとして、ここに並
行世界から来てもらいました。

萌さんは、あと2年で罰が取り消しになりますよ。

この世界の下準備をアルさんの為に先に動いてもらいました。
あとのことを引き継ぎし。

終わったら、期間までこの世界で、ゆつくりして下さい。」

アル 「で 何？」

死神 「貴方の、チート的な力の設定ですねぇ。

上司が今から、設定するなんて、書類が増えるからって、勝手に設
定してしまいましたので、その報告と説明です。」

アル 「ん て、ことは、萌さんは自分の事知ってたんですか？」
萌 「まあね。」

アル 「酷い。 けど綺麗だから許してあげる。」

萌 「>> 綺麗」美人？<< ありがとうね。」

死神 「アルさんは、今まで、いろいろな力を使ったものだけ使えます。

なのでもう、他のチートの力は私達からはあげられないです。

アルさんは、写輪眼があるからそれでなんとかして下さい。

簡単に説明しましたが、質問ありますか？」

アル 「少し解らないけど、萌さんがいるから、相談相手してもらいます。」

死神 「では、又お願いができればきます。 サヨナラ。」

萌 「今からは、アル・ロングを飛天御剣流 第9代比古 清十郎に任命します。」

アル 「そんな名前知らない。」

萌 「飛天御剣流を、教える権限もつ者だかね。

この名前を持たない者は、教える事は出来ないのね。」

アル 「まあ、教えなかったら、名前を名乗らなくいいのか？」

萌 「その通りね。」

萌 「最後に、練習試合の相手なら>>古流 御神流<<の使い手

を探してね。

戦術は、闘いで教えてもらいなさい。
御神の人達、いい人達ばかりだね。」

萌 「お金欲しかったら、裏の仕事紹介するね。
あと、ルックから伝言で修行が終わったら特待生で学校に行けだそ
うよ。」

アル 「転生前は、いちよう大学卒業している。
どこから通うの？」

萌 「大学からよ。」

萌 「それも、ハーバード大学ね。
3日後、特別に入学試験があるから受けてね。
アルちゃんなら、その能力とスキルあれば平気でしょ？」

アル 「その手があるね。」

萌 「その能力、使えば一年間で大学院まで。
卒業も出来るでしょうね。」

「外国だから跳び級」

萌 「そうそう。これ、私の連絡場所ね。
それじゃ、私はこの世界の家に帰るね。 サヨナラ。」

アル 「ありがとう。 師匠ありがとう。 サヨナラ。」

3日後、ルックに連れられて、ハーバード大学に行った。
どの科に行くのか、何も考えなかった為、全教科「受けてね」と
言われた「大学一年」院卒業までの試験」2週間ぐらいかった。
結果は5日後、ルックから聞かされた。合格らしい。

ルック 「おめでとう。」

アル 「ありがとう。」

ルック 「試験は、オール満点。」

だから、一年間で出席に8ヶ月前後、レポート必要なだけで、
ハーバード大学院全科を卒業出来るそうだよ。」

アル 「適当に、写輪眼で教科書丸暗記しただけ。
なのに、全教科満点。 ありえない。」

ルック 「入学は、来年度からだ。」
アル 「わかった。」

アル 「なのはが、覚醒までに海鳴に行かないとね。
その為の、生活費を貯めないとね。」

アル 「今から、色々な特許取ろう。
それでなんとかなるだろう。」

特許のお金がある為、萌さんに連絡し裏の仕事紹介してもらった。

三回、仕事をしただけで、かなりの大金をもらえた。
これで、特許が取れそうだ。

三歳〜四歳

入学までに、特許だけで、普通の生活が出来るようになった。
学校に行ったら、片っ端からレポートを作成しないと一年間で卒業が出来ない。

夜は、修行と特許取得。

休みは、萌さんから裏の仕事を紹介してもらって、お金貯めてる。

アル 「萌さんの、裏の顔ってどこまですごいのかなあ〜？」

仕事内容は、ただの護衛なんだけに行った、先々で襲われる、護衛対象者だから守りきるのだからそのぶんボーナスがある。

アルは、基本的に学校は行くけどルツクの部屋でレポートを作成している為、全教科1ヶ月一回授業を受けないといけない。
まあ、三歳で大学行てる訳で当たり前前に、苛めは受けてます。
アル的に、一年間だけ我慢すればいいと思った。

ある日。

アルが仕事終わったら。

萌さんから電話があった。

萌 「もしもし…アルちゃん、落ち着いて聞いてね。」

いつもと違っていた。

アル 「落ち着いてますよ。」

萌 「ルックが ルックが 死んだ。」

萌 「生徒が、自爆テロをしたらしのね。

その時に、巻き込まれたそうよ。」

アル 「遺体は在るの？」

萌 「バラバラだけど、全部でないけどあるわよ。」

萌 「とりあえず、葬式の準備は私がしてるから早く帰って来てね。」

アル 「わかりました。 ご迷惑おかけしました。
連絡ありがとうございます。」

戻ると。

萌さんが葬式会場を指揮してました。

アル 「萌さんに、感謝しないね。」

アル 「パパは、萌さんに迷惑かけばなしだね。 ママと幸せにね。」

萌 「三歳児の言葉じゃないね 「転生者なんだろうけど」。
子供らしい言葉聞きたかったかもね。」

萌 「まだ、三歳なのに家族居なくなるなんて。
可哀想、大学に友達いないみたいだし、 残りの時間で、無事卒業
出来るのかしらね？」

アル 「レポートは、終わってるから。
あと、授業を受けるだけだよ。
最低あと、2ヶ月以内だったはず。」

アル 「あと、少しだけだから。 心配しないでよ。」

数日後。

萌 「アルちゃんの特許で仕事したいと言ってる人がいるから。
時間を作って欲しいらしいのよ。」

アル 「萌さん、来週なら何時でもいいですよ。」

萌 「来週の火曜日にしよう。
知り合いのお店、貸し切りにしましょう。」

アル 「え 萌さんその人護衛対象者？」

萌 「そうよ。今の仕事、この人の期間が終わったら。残り時間、死神くるまで遊んで待つよ。」

約束の火曜日、萌さんから聞かされていた。
お店に行った。

萌 「アルちゃん、こっちょよ。」

アル 「こんにちは。」

萌 「はい、こんにちは。」

たわいない話しを、しながら仕事の相手の所まで行った。

仕事内容を話し。

アル 「契約内容が、本当にいいのか？」

一方的に、凄いものだった為。

アル的には、生活が出来るだけ貰えればいいと思ったからだ。

仕事相手 「大学卒業後、日本に住むなら、私がお世話したいと思ったからですよ。」

仕事相手 「この、契約内容でサインして下さい。」

アル 「しましょう。」

アル 「日本の、海鳴市はわかますか？」

仕事相手 「え 知ってますよ。」

私も海鳴市に住めますよ。」

仕事相手 「海鳴なら、契約通り、土地と家は古いですけどすぐに用意ですよ。」

家は2ヶ月ぐらいもらえばリホームもしましょう。」

アル 「ありがとうございます。」

それで、お願いします。」

仕事相手は、その言葉を聞いたら電話をしだした。

仕事相手 「なんだね、問題でもあったのか？」

電話相手 「土地と家の権利はなんとか出来ましたけど。」

電話相手 「戸籍を日本に持って来ると。」

いくら大学院卒業していても、年齢的に学校行かないと日本に戸籍入れれないそうですよ。」

仕事相手 「どうするか、聞くから待つてろ。」

仕事相手 「海鳴に、住むなら学校行かないと無理みたいなんだけど、どうしますか？」

アル 「学校てまさか…。」

仕事相手 「小学校ですよ。」

アル 「え 四歳で、小学校てありえない。」

仕事相手 「学校なら、私の子供の所なら融通効きますよ。」

アル 「海鳴に、住むならしかたないか。」

お願いいたします。

大学院卒業なので、一年生からは、勘弁して欲しいですよ。」

萌 「ん アルちゃんまだ、卒業してないでしょ？」

アル 「ああ 昨日調べてもらったら、あと2日、行けばいいみたいです。」

萌 「なるほどね。」

仕事相手 「なら、私は日本に戻って校長と話してきます。」

後の事は、緋村くんから連絡させるよ。」

仕事相手 「それでは、失礼します。」

萌 「又、連絡するね。 バイバイ。」

アル 「これから、宜しくお願いいたします。」

萌さん、バイバイ。」

アルは、家に帰り、 少しずつ日本に行く準備しだした。

それから3日後。

アル・ロングは、無事卒業しました。

家で、親の遺品を整理していたら、いつの間に「写輪眼」を使っていたのを鏡で気づきました。鏡の横にある、親の写真を見たら目に、違和感を感じて、鏡見たら「写輪眼」が新たな覚醒をしてました。

それから、2ヶ月ぐらいたった。

ある日。

電話がなった、相手は萌さんからだ。

萌 「もしもし、 アルちゃん。

こないだの仕事の事で。」

アル 「はい。はい。」

萌 「簡単に説明すると、今すぐに学校に入れないみたいなのね。」

萌 「それを、国に説明したら、学校行く事が条件だから、行けるようになつてから、行くなら、今日からでも手続きしてくれるみたいよ。」

アル 「荷物だけは、先に全部送ったから。

あとは、四歳になったら、海鳴に行きます。

それまで、こないだの、裏の仕事で会った人の所で修行をしようかなと。」

萌 「場所はどこ?」

アル 「確か香港。」

萌 「その人は、女で刀二本持ってた？」

アル 「違うよ 髭を、はやしたおじさん。特殊部隊を育ててるらしいから。」

アル 「その、女の人はどうしたの？」

萌 「気にしなくてもいいよ。」

香港警防隊の隊長で、裏の仕事を幹旋してる人物。

「御神流の剣士」このことは、私がこの世界から消えるときまで秘密。

アル 「香港の修行が、終わったら連絡します。」

萌 「なら、荷物は私が整理して、いつでも住めるように片付けようかしら。」

アル 「任せます。」

萌 「なら、修行頑張ってね。」

この後、香港に行くアルだった。

三歳～四歳（後書き）

後2、3話で　なのは第1話に入れそうです

香港修行

アルは、香港空港のロビーで髭のおじさんを待っていた。

??? 「オーイ。」

アルは、声した方をみたらおじさんが手を振っていた。

アル 「おじさん、お久しぶりです。」

おじさん 「おじさん！？あのなあ」 ジャフて名前があるんだけどなあ。」

アル 「こないだ、名前は聞いて無かったんですよ。」

ジャフ 「そうだったか？ それは悪かったねえ。」

ジャフの車に乗って、修行場所に向かった。

ジャフ 「修行場所は、街外れの廃墟ビル「元ショッピングモール」だから、そこに特殊部隊を配置させてるから。

部隊と部隊候補正合わせて300人。

アルくんVS300人、期限は3日でどうかな？」

アル 「それをお願いします。」

アル 「相手の方に、本気で殺しにくるように伝えてください。
で、ないと僕の修行になりませんからね。」

ジャフ 「わかった。」

廃墟ビル修行は、予定3日だったのに30分で全滅させた。

アル 「なんで、あんなに固まってるの？」

ジャフ 「あの位置から、あの攻撃は予想して無かったよ。今の、戦いを元に作戦したあと、又宜しくね。」

アル 「次はちゃんと、銃器は使ってくださいね。さっきは、一発も撃たれ無かったから。」

ジャフ 「わかった。」

ジャフ 「御神流と同じ速さで攻撃するのか。」

ここでの、修行はこの繰り返しをして「写輪眼」を確実に使えるようになった。

ジャフ 「アルくん、少しいいかな？」

アル 「何ですか？」

ジャフ 「アルくんの、修行を見た人がいてね。
アルくんが、よかったら試合して欲しいそうだ。」

アル 「どんな方なんですか？」

ジャフ 「素性は知らないけど、俺も同僚に頼まれただけだからね。」

確か御神で名前だったかな。」

アル 「御神」「御神流の剣士かも」 自分も、そろそろ本気で戦いたかったから、受けますよ。」

ジャフ 「同僚にそう伝えておくよ。」

ジャフ 「え 今まで本気でないの！」

やっと、あいつらがアルくんに、まじな攻撃できるようになって、訓練に身が入りだしたのに、これはあいつらのいない所で試合してもらおう。」

ジャフは、同僚に連絡し場所を聞いてアルくんとそこに向かった。

待ち合わせての場所まで、ジャフに送ってもらった。

ジャフは本部に、戻って書類整理しにいった。

片付いたら迎えにくるらしい。

アル 「この、廃墟「体育館」の中に居るね。 気配をわずかに感じる。」

アルは、中に入りだしたそこに、高町 士郎さんがいた。

アル 「こんにちは。」

士郎 「こんにちは、僕は「御神 士郎」といいます。
御神流を教えている者です。」

アル 「おいおい 名前偽るのかよ。」

自分もう1つので「比古 清十郎」です。」

香港修行（後書き）

ジャフの同僚は

御神 美沙斗 です

士郎VSアル

アル 「御神の剣士でないの？」

士郎 「昔は、そう名乗っていたよ。」

アル 「腕は、おちてないですよ？ 自分は古流 飛天御剣流です。」

士郎 「やはり、抜刀術で神速の流派か。」

士郎 「腕は、おちてないないけど。 体力は落ちたね。」

アル 「まあ後は、刀で話し合いでいいのでは？」

士郎 「だね。合図は、どちらかが動き始めたらいいいね。」

アル 「はい。」

それから、二人は動きもしない様子見く。

アル 「さすがに、士郎さん 隙がない。」

士郎 「あの子、抜刀術ってことか。
神速で一気に攻めるか！」

先に、動きだしたのがアルである。

動くと、同時に写輪眼を発動さて、その後、信剣で様子みよう。

士郎 「む。 速いし、これは幻術か？」

士郎は、神速で回避した、瞬間に斬撃で幻術に攻撃しアルの信剣を消した。

アルは、士郎の神速が見えなかった。「写輪眼」でも無理なのか、なら初めて実戦で使ってみるか「写輪眼2 発動」。

そんなこと、考えていた為に士郎が神速で攻撃して来てるのに気づかないアル。

士郎 「虎乱。」

は切り札だから 神速で攻撃した。

アルは士郎の攻撃当たる瞬間に写輪眼2が発動したからなんとかギリギリでかわせた。

アル 「これでも速さが無理か スーパーサイヤジン4 になって奥義で勝負。」

士郎 「あれを、かわすか。」

体力的に次で、決めないとやばいな。」

アル 「一気に、パワーを上げてスーパーサイヤジン4 になった。」

士郎 「なんだ、この覇気は、あの子なんかフィンキが変わった？あれだと、次の攻撃で勝負するきだね。」

士郎も次で、勝負するために数回深呼吸して息を整いた。

士郎が、本気で神速で動いたアルは天翔龍閃にかけた。

士郎は、隙を狙うつもりだったのに、あの構えは抜刀術か。

士郎 「本気の一撃の抜刀術勝負か。」

士郎も、アルの行動見て真っ向勝負することにした。

士郎は神速＋虎乱で。

アルは天翔龍閃で、二人攻撃が終わったら、同時に倒れた。

アルは、気絶前に自分と士郎に回復魔法かけた瞬間に意識をなくした。

最後の、攻撃するとき1人見ていた人がいた ジャフだ。

ジャフ 「最後、何も見えなかった。」

動いたと思ったら同時に倒れたからだ。

ジャフ 「これが神速VS神速の戦いか。」

ジャフが二人の近くに行くと二人とも無傷？

ジャフ 「アルくんが、気絶する前に治療したのか。」

ジャフは、アルが何かの力で治療出来るのを知っていたのだ、修行中アルに怪我させられた相手を治療を見たからだ。

ジャフは、気絶している二人を起こし。

起こし終わったら、二人に。

ジャフ 「相打ちだったよ。」

と伝えた。

後は、世間話しをして土郎さんと別れた。

アルは、3日後日本に向かった。

アル 「ここが海鳴か。」

アル 「家は、海鳴公園から見えるって、聞いていたから、まず公園に向かった。」

公園に着くと、たまたま買い物帰りだった萌さんに会った。

アル 「お久しぶりです。」

萌 「お久しぶり。背のびだね。」

そんな話しながら、家に案内してもらいました。

萌 「ここが、アルちゃんの家よ。」

アル 「え 家って言うかお屋敷だね。」

萌とアルが、家に入り椅子に座ると。

萌は、裏の仕事を紹介して連絡先も渡した。

アル 「美沙斗さんか 名字は？」

萌 「御神。」

萌 「香港警防隊 隊長してるから。」

萌 「明日、 護衛対象の仕事が終わりだから。」

アル 「なら、 今から会える?。」

アル 「お礼したいし。」

萌 「確認してみるよ。」

萌は、明日以降裏の仕事しないらしいから。

萌 「今からなら、平気らしよ。」

アル 「なら行くか。」

アルは、萌に道を聞いて先に向かった。

アル 「ここか。」

呼び鈴押して、名前を名乗ったら門が開いたので中に向かったら
執事の人かな?<。

執事 「アル・ロング様。」

執事 「私は執事の鮫島と申します。」

鮫島 「こちらにどうぞ。

主が中でお待ちしてます。」

付いて行って、部屋に入ると。

仕事相手「デビット・バニングスがいた。

簡単な挨拶と仕事の事と学校の事を話した。

デビット「あれなら、暇とき娘の相手「護衛」してくれないか？」
アル「そちらの方は、考えさせてもらいますよ。」

アルは、ご近所にも挨拶したいから又お茶付き合うことを約束し家に帰った。

ご近所に、挨拶周りし後はゆっくりしていた。

デバイス起動（前書き）

アル・ロング 設定

身長 135cm 体重 35kg 歳 5歳 髪 赤・長さは腰迄ある

顔 女顔

飛天御剣流 継承者

希少スキル 写輪眼

魔法ランク なし

魔力 EX

魔力変化 雷・風

瞬間移動 影分身 武空術 架設空間

架設空間は部屋などを魔法で異次元空間を作る 重力付加機能 時
差調整機能がある

写輪眼2は「輪廻眼」と「万華鏡写輪眼」合わせた眼になる 写輪
眼は動きの先読みと技のコピー 幻術見せることもある
スーパーサイヤジン4は、ただ服が毛皮に変わって見えるだけ

デバイス起動

アルは、ゆっくり休んでいたら、適当に広くて何も置いてない部屋を見つけた。

よし、この部屋「修行部屋」にしよう。

架設空間魔法使って、いつでも使えるように魔力固定した。
風呂の後で、この部屋の設定しよう。

アルは、風呂からでてきたら、昔拾った本が眼についた。
本を持ったまま、架設空間の中入り、最終設定した。

アル「起動テスト「よし」後は、時差調整は>一時間で3ヶ月<
重力付加は後しよう。」

アルは、未だに魔法コントロールが苦手だ。

架設空間で、魔法使える場所が出来たから今日から、魔力コントロールも修行に入よう。

アル「よし、始めるか。「写輪眼2」使って、魔力コントロール

ル覚えよう。」

アルが、魔力を使い出したら突然本が、浮き上がり本に付いてた鎖が切れた。

その瞬間、光だしアルの魔力吸収し出した。

本から女の子の声で。

??? 「起動確認しました。」

光が部屋全体に拡がった。本から女の子が現れました。

アル 「もしかして、ユニゾンデバイス？」

女の子 「はい、王様。」

アル 「本に、封印されてたの？」

女の子 「違いますよ本は、魔法の基本ベースが記憶されてますよ。王様。」

アル 「名前なんて言うの？」

女の子 「ないです。 本の名前は「源の書」て言います。」

アルは、女の子見てリンフォースに似ているなあと思った髪と目いがい。髪の色が赤、目は輪廻眼だったのだ。

アル 「名前か。」

アルは、名前なんて考えられるのが　>タマ<　しか思い付かなかったのだ。

アル 「「源」からミナトでいい？」

女の子 「王様が、名前つけてくれるなら嬉しいです。」

アル 「なんで王様で、呼ぶの？」

ミナト 「源の書は、アルハザード王の魂しか起動することが出来ないからです。」

ミナト 「王様の、記憶眠っていますね。私の魔法で起こしますね。」

ミナトにより、記憶が目覚めアルの魔法コントロールがわかり。

ミナトは治療が得意で後、魔法コピーとか、ベルカ以外の術式をベルカに変えることができる。

ミナトが、できて魔法の修行が意味がなくなった。

アル 「これ以上自分だと何していいかわからん。」

プレシア・テストロッサ と取引

架設空間で、ミナトのことやアルのやる事 とか色々話した。

アルは、ミナトから命令魔法＜合言キー＞で強制することができます
みたい。

ミナト 「強制できるのは「デバイス」「戦闘機人」「魔力に
よる機械」 だけです。」

ミナトは、その魔法をレクチャーした。

ミナト 「本「源の書」 を出し、ページをめくり。魔法陣が展開
され。

「王様、今から私の魔法で王様が使えるようにします。動かないで
下さいね」

ミナトは、無唱でアルに魔法を掛けた。
アルの足元に魔法陣が表れ、アルの周りで光だし、その光がアルの
身体に入った。

ミナト 「王様、これで「合言キー」だけで強制できます。魔力は
入りません。」

アルは、頭で感じた>合言キー<確めた。

アル 「王の命より 小さくなれ。」

ミナトは小さくなった。

アル 「成功？」

ミナト 「はい、王様。」

アル 「明日から原作ブレイクの準備しよう。ミナトも手伝ってね。」

ミナト 「はい、王様。」

と笑顔で返事をくれた。

それから、架設空間から出て二人は眠った。

次の日、ミナトにパソコンを二台渡し、宇宙の情報集めを頼んだ。
アルは、学校に編入手続きと試験を受けに私立聖祥大学付属小学校
に行った。

試験は、大学院を出ているため義務教育の中学3年生の試験を受け
た。もちろん全教科満点だった。

あとは、手続きをし義務教育までの授業料を払い。
後、制服が2ヶ月ほどかかるみたい。

制服がきてから通う事にした。

ちなみにアルは、小学3年生から通う>アル 五歳で<。

手続きの帰りに、原作ブレークの為に、美沙斗さんに電話し、これ
から起きる事件として協力してくれるように頼んだ。

アル 「よし」 これでKYを更正できる。」

ミナトに、携帯を買わないとね。念話だ不味いときがあるから。情
報連絡もかねて。

アル 「ん 強い力」

アルは、力の相手の気を感じた。そのまま集中し瞬間移動で向かった。

ついたらプレシアの前についた。

プレシアは 「何者。」

とデバイス起動させた。

アル 「大魔導師、プレシア・テストロッサさんですか？」

と聞いた。

プレシア 「そうよ。」

と、言いながら魔法攻撃してきた。

アルは>合言キーを唱えく。

アル 「王の命より 一時モードリリース。」

プレシアのデバイスが、待機状態になって。

プレシア 「何をした。」

と叫んだ。

アル 「貴女と取引したいんですが。」

無言。

アル 「そんなに、警戒しなくていいですよ。身体に良くないですよ。まず、このデータを見て下さい。」

プレシア 「これは、ジュエルシード」この、戦艦は時空管理局じゃない。」「アル 「やっぱりか。」

色々お話し。

取引をした。

プレシアの病とアリシアの蘇生を。

アル 「それだけでいいですか？」

プレシア 「そうね。」

アル 「なら、取引成立ですね。」

治療の準備ができれば、連絡しますね。

あと、地球に入る為の書類です。

ここにサインしてください。

地球に入る時、それを持っていれば、攻撃されません。

なら、フェイトとアルフをお借りしますね。

アル 「「フェイトさん」「アルフ」

俺に捕まって。」

アルは、瞬間移動で帰った。

家に帰ってから、プレシアと同じ書類を出してきてサインしてもらった。

これで、テストロッサの家族は地球入国が許可されたよ。
不法侵入で捕まらないよ。

ミナトを紹介し、ジュエルシード集めの打ち合わせした。

ミナトに頼んでいた、病を抑える薬を用意してもらった。
その薬を持って、プレシアのところに行った。薬渡したら。

プレシア 「「管理局へアクセスは、これでできるよ。」通信端末
をもらった。」

家に帰ってから。

フェイトと話し、原作通りに進めるのは。「なのはの戦い」「な
のはVSフェイト」あとは手分けして確保。

そして、明日からは学校だ。

プレシア・テストロッサ と取引（後書き）

いきなり原作ブレイクしてみました

御神 士郎探し

アルとフェイトは、架設空間にいた。

フェイトに、バインドと結界魔法を教えもらってた。

フェイト・アルフ 「「凄い」 一回見ただけできるなんて。」

フェイト 「私より頑丈なんて…。」

アルは、結界魔法面にAMF追加する事ができた為、 架設空間魔法と結界魔法合わせて設定変更した。

アルの結界魔法は強度は「AA SSS」。

これにより、架設空間でも攻撃魔法の練習可能になった。 >部屋に張った結界は魔法「SSS」でないと破壊できないのだから。

アルは、部屋を出て美沙斗さんに連絡していた書類と今後の態様について。

ミナトが、様子を見にきたから明日からの計画を話した。 アルは、

学校に行っている間、ミナトは通信端末で管理局の不正調べ、フ
イトはミナトが落下位置を割りだした地図を渡したくジュエル
シード集めでいいか。

明日はミナトのはく「覚醒」する日。

次の日。

先生「今日は、新しいお友達を紹介します。
アメリカからの転入生です。アル・ロングくん、どうぞ。」

アルは、呼ばれたので教室入りました。
先生の横に行った。

アル「アル・ロングです。五歳です。
よろしく願いいたします。」

先生「アルくんはアメリカで特待生なので歳が違います。」

授業が始まり少したったとき、ミナトからメールがきた。音とバ
イブは切ってる。フェイト達が、ジュエルシードを八個集めてきた
らしい。

休憩時間きたら、アリサが話しかけてきた。

アリサ 「アルくん、もしかしたらパパの仕事の人？」

アル 「仕事の関係者だね。デビットが娘を自慢するわけだ。」

アリサ 「……」

なのはとすずかとも簡単に挨拶した。

学校が終わり。

すぐに家帰った。

アルは、刀持ち翠屋に行った。

アル 「ここが翠屋か。」

中に入ると。

桃子 「いらっしやいませ。」

と桃子さんが、近くにきた。

桃子 「空いてる席にどうぞ。」

アルは、カウンターの席にした。
刀が置きやすかった為。

桃子さんは、アルの刀を見て奥の方に行った。

少ししたら、2人で出てきた。

士郎 「ねえ、君そんな物「刀」 持ち歩いてはいけないよ。」

アル 「お久しぶりです。御神 士郎さん。」

士郎 「誰？」

アル 「比古 清十郎です。」

士郎が周りを気にしていた。

アル 「美沙斗さんから、伝言預かってます。」

士郎 「家の方で、話ませんか。」

アル 「いいですよ。」

士郎は、奥で準備しに行った。

アル 「お持ち帰りで、シュークリームとケーキを買った。」

そのあと、士郎と家に行き話し ちゃんとお互いの名前を名乗った。

士郎 「アルくんの、刀見せくれる？」

アル 「いいですけど。 持てないと思いますから。」

抜けて、地面においた。

士郎 「変なこと言うね 「ん」 重い？」

アル 「「１七」ありますからね。」

士郎は、この重さで戦ってたのか？ 香港のことを思い出していた。

あとは、 伝言の返事は美沙斗さんにするみたいだから。

アルは、 家に帰った。

アル 「「ただいま」 これお土産、 フェイトこれ小さい方をプ

レシアさんに持てってね。

ついでにこの薬もね。プレシアさんに、ちゃんと食べさせてから薬も飲ませてから、帰ってくるんだよ。」

アル 「フェイトの分も入ってるからね。 お話しながらゆっくりしてきな。」

フェイト 「うん、 ありがとうね。」

フェイトは、はしゃいで、ケーキと薬を大事に持って転送魔法で、時の庭園くに行った。

アル 「アルフは、食べる前に架設空間にあの機材を運んでね。」

アルフ 「はい。」

アル 「ミナト、管理局のデータ見せて。 あとお茶にしょ。」

ミナト 「今、これだけが限界かも。 私が、お茶入れてきますね。」

アルフ 「運んだよ。」

アル 「ありがとう ここまで酷のか。」

ミナト 「あと こっちのデータを。」

アル 「ん」 今回のジュエルシード と プレシアさんのことも、こいつが関わってるのか。

名前は「ヤン 提督」か。

KYとリンディさんの時にこれを使って交渉しよう。」

アルは、データを見たあと架設空間で機材を組み立てた。

アル 「あとは、フェイトがなのはから手に入れてくれば、原作だとくれるはずだから。」

そろそろ、なのは覚醒かな。

なのは覚醒

アルは、動物病院の近くの空にいた
なのは「覚醒」を見に来た

ちょうど、変身する前みたいだ

ユーノ 「我、使命を受けし者なり」

なのは「我、使命を受けし者なり」

ユーノ 「契約の下、その力を解き放て」

なのは 「契約の下、その力を解き放て」

ユーノ 「風は空に」

なのは 「風は空に」

ユーノ 「星は天に」

なのは 「星は天に」

ユーノ&ユーノなのは 「そして、不屈の心はこの胸に」

ユーノ&ユーノなのは 「この手に魔法を」

ユーノ&ユーノなのは 「レイジングハート、セット・アップ！」

レイジングハート「stand by ready・set up・

」

アル 「なんて力だ」

アルは、飛ばされそうになった

アル 「写輪眼2を発動させて動きをみるか」

そろそろ、終わりそうだな

ユーノ「封印すべきは忌まわしき器。ジュエルシード!」

なのは「ジュエルシードを封印」

レイジングハート「sealing mode・set up」

「stand by ready」なのは「リリカルマジカル

ジュエルシード、シリアル21 封印!」

レイジングハート「sealing」 「receipt num

ber XXXI」

アル「ほう、あれがレイジングハートの力か」

アルとミナトは、輪廻眼で場所が離れていてもお互いに見える

アルとミナトは、なのはの、戦いを念話で話してた

数日たち、新たなジュエルシード発動確認した

又アルだけ、離れた所から見学

なのは「元を見つければいいんだね」

ユーノ「えっ」

レイジングハート「Area Search」

なのは「リリカルマジカル 探して、災厄の根源を」

なのは「見つけた! すぐ封印するから」

ユーノ「ここからじゃ無理だよ、近くにいかなきゃ」

なのは「できるよ！大丈夫！」

なのは「そうだよね、レイジングハート」

レイジングハート「Shooting Mode」「Setup」

杖の形が変化したね

なのは「行つて、捕まえて！！」

どぎゅーん

レイジングハート「Stand by Ready」なのは「リリカルマジカル ジュエルシードシリアル10 封印！！」

レイジングハート「Sealing」「Recipe Number x」

なのは「ありがとう、レイジングハート」

レイジングハート「Good Bye」

アルは、今のデータをフェイトに見せて練習しようと思いフェイトに念話で話し、練習しだした

アル 「次の、ジュエルシードはフェイトうまく手に入れてね」

フェイト 「うん ガンバル」

レイジングハート「Shooting mode」「Divin

e buster Stand by」

バルディシュ「Photon lancer Get set」

なのはが、気絶し飛んでいった、それをユーノが魔法で受け止めた

フェイト「封印」

バルディシュ「Sealing form・Setup」

Order」「Yes sir」「Sealing」「Captured」

終わりを、確認したらアルは、翠屋に行きケーキを買った

フェイトに、ご褒美の為に

プレシアとアリシアの治療

アルは、アリシアの蘇生の準備におわれてた

アル 「フェイト」今日は、この辺りでジュエルシードが発動しそうだな。

温泉があることはフェイト あの子「なのは」と戦っていいよ 先に、回収してそれを賭け フェイトが勝てばあの子「なのは」から一個貰うようにしてきな」

アル 「今日、ジュエルシードが二個集めれば治療にかかれる」

フェイト 「本当に」

今までで、一番の笑顔を見せた

アル 「だから、今日は見学に行けないから、怪我しないようにね。あと、早めに行って温泉の下見して予約してきてね。治療後は、温泉が一番いいから」

フェイト 「はい」

アルフ 「温泉 温泉」

そのあと、フェイトとアルフは温泉の下見に行き。
アルは、プレシアさんを迎えに行った

時の庭園では、プレシアが支度をしていた。

アルの薬を飲んで病気の進行と痛みをおさえてるから。

アル 「プレシアさん、お久しぶりです。 少しは顔色いい見たいですね」

プレシア 「ええ アルの薬のお陰よ」

アル 「あの、荷物は此処に転送して下さい。

あとは研究室と駆動炉は僕が転送します」

アルとミナトは、荷物を運びし、 プレシアさんはアリシアに服を着せしてもらった 「治療に集中する為だ」

アル 「「ミナト」フェイトが、戻るまでアリシアの身体に維持魔法掛けといてね」

アリシアは、戻る「フェイト」までに架設空間の中に特別架設空間を作っていたのだ。

アリシアが、目覚めたらフェイトと同じぐらいにする為だ

アル 「そろそろ プレシアさんの治療をしますから、そちらのベッドをお願いします」

プレシア 「「ええ」 ベッドに横になった」

アル 「「ミナト」始めるよ」

ミナト 「はい 王様」

アル & amp・ミナト 「「ユニゾン イン」」

プレシア 「ええ ミナトさんて デバイスだったの？」

アル 「そのことは、フェイトが戻ってから 話します」

ミナトは、源の書を開き呪文を唱え出した アルは、プレシアのリンカーコアの治療しだした

アル 「プレシアさん」

治療成功しました

プレシア 「なんか、夢見てるのかしら」

アル 「あと この薬を飲んで下さい 少しだけ「若返り」です」

プレシア 「本当に」

プレシアさんの目が輝いてる

アル 「フェイトが、戻るまで、 寝ていて下さい。
起きたら薬が効いてるはずですから」

アル 「ミナトもやすんでね」

架設空間の中だからフェイトが戻るまでならかなり休めれるよ

アルは、研究室の荷物を地下に運んだり プレシアさんの事件を調べたりして、 フェイトの帰りをまつた

フェイトの方は

フェイトが、先にジュエルシード封印した時になのは達が来た

なのは「レイジングハート、お願い。」

レイジングハート「stand by ready・set
p。」

フェイト「バルディッシュ」

バルディッシュ「yes・sir。」「Sealing form・
Set up。」

なのは「どうして 話し合いで解決出来ないの？」

フェイト「同じ物の為なら敵同士 ジュエルシード 1つずつ賭
けて勝負」

レイジングハート「Flier Fin。」

バルディッシュ「Photon Lancer・get set。」

「Thunder Smasher。」

レイジングハート「Divine Buster。」

なのは「レイジングハート、お願い。」

レイジングハート「All right。」

バルディッシュ「scythe slash。」

レイジングハート「put out。」

なのは「レイジングハート、 どうして？」

フェイト「主思いの、いい子だ」

フェイトは、ジュエルシードを受け取って 家に帰った

フェイト& a m p ;アルフ 「ただいま」

アル 「お帰り」

ミナト「お帰り」

プレシア 「お帰り」

フェイト 「お母さんの？ 病気治ったの？」

プレシア 「ええ 治ったわよ 何で泣くのよ」

フェイト 「なんか、若くなった？ うれしくてね」

アル 「アリシアの為に、若い身体にしてあげたの」

アル 「ジュエルシード どうなった？」

フェイト 「あの子」なのは「から一個貰ったから二個集めたよ」

アル 「よし」

フェイトから、ジュエルシードを貰いアリシアの治療に向かった

アル 「治療に、ジュエルシードの力を使うから万が一があるから
フェイト達は部屋の外にいてね」

フェイト& a m p ;アルフはうなずいた
プレシア 「アリシアをお願いね」

アル 「はい」

アルとミナトは、ジュエルシードをアリシアの身体の上に浮かせた

アル 「よし 始めるよ」

アル & amp・ミナト 「ユニゾン イン」

架設空間の時間で八時間かけてアリシアを蘇生させた

アル 「アリシアの蘇生を成功しました。 今、最後の手当てをミナトがしています。

あと、フェイトの服を持って来てください。 背もフェイトぐらいまで成長したもので」

ミナトがでてきて、フェイトから服を貰いアリシアに着せさせた

ミナト 「あとは、アリシアちゃんが目さめるまで。

時間かかると思いますが、もう寝ましよう」

架設空間だから外の時間にしたら「明日の朝ぐらいかな」 アルが

声掛けて皆でロビーで寝た

温泉で一休み

翌朝、アリシアが目覚めた。 プレシアさんが泣きながらアリシアを抱きしめた

アリシア 「お母さん 痛い」

プレシア 「ごめんなさい」

フェイト 「アリシア病気治ってよかつね」

アリシア 「ありがとう で誰？ 私？」

アリシアは、フェイトを見て混乱しだした

プレシアさんが、アリシアを落ち着かせ説明してなんとか納得してくれたみたい

アル 「アリシアちゃん、この薬を飲んで下さい。 後遺症を抑える物です」

ミナト 「皆さん、朝ごはんですよ」

皆なで朝ごはん食べているときに

アルは電話かけだした

アル 「今日から2、3日休みます 親戚の人達が引っ越してくるので」

そう 温泉に行く為、学校を休むのだ

皆で、フェイトが予約した温泉宿行った

アル 「プレシアさんとアリシアちゃんは最初から長湯しちゃいけなよ 血液の流れ悪くなって命落とすかもだから」

プレシア & a m p ; アリシアは少しびびってました

フェイト 「確かに、病気の人や病み上がりの人は最初は短めにつて予約したときに言われたよ」

アル 「泊まりなんだから数回に分けて入ればいいよ」

アル 「女性陣達は温泉に入ってきたな」

女性陣 「はい」

フェイト 「アルは行かないの？」

アル 「うん 先に会計や調べ物したあと入るよ」

フェイト 「わかった ならまたあとでね」

この「またあとでね」がアルにとってフェレットとユーノくと同じことに気づいてなかったのだ

アル 「調べたけどやっぱり この事件は管理局が計画してるなあ
ここまで、証拠と不正をまとめた書類を美沙斗さんにデータを送り
次KYが、現れるはずだからそこで動きを撮影と何か起こしても態様できるようにしてもらったためだく会計を終わらし」

アルも温泉に入った

アルが、部屋に戻ると夕食が準備してあった

アルが、座ったら皆で食べ始めた

アル 「フェイト」 「アリシア」 この事件終わたら学校に行けるように今手続きしてるからね」

プレシア 「ごめんなさいね」

アル 「いえいえ 最初の契約だかね 明日からあの研究を始めて下さい 地下に設備は移動を終わって設置してます」

フェイト& amp ;アリシア 「学校？」

アル 「そうだよ」 「フェイト」計画通りだと次で管理局がくる、はずだからそこで例の計画通りに動いてくればいいよ したらフェイト達の地球側から正規の戸籍発行してくれるから」

アル 「今は事件協力滞在許可だけなの」

プレシア 「アルちゃん」 ミナトさんの事とか教えてくれるかしら？」

アルとミナトは自分達の事を話した

プレシア 「アルハザード」 なるほど私とアリシアが助かるのね アルちゃんの頼みの研究はアルハザードをもとに？」

アル 「はい」

研究内容は、新しい薬の製作とリンカーコアの治療です

あと、色々お話して皆で温泉に行くことに

入り口で

アルが、男の方に向かったら

アリシア&フェイト 「どこ行くの？」

アル 「男の方」

フェイト 「一緒はいろいろよ」

アリシア 「そうよ」

アルは、ことわろうとしたら

プレシア 「五歳の子供も一人に、させられないわよ」

アルは、その言葉を聞いたら周りを見たら皆がうなずいてた

アルは、こうして女湯に連行されました

このあと、ゆっくりして家帰った

キャラ 設定

アル・ロング

身長 135cm 体重 35kg 歳 5歳 髪 赤 長さ腰迄

ある

飛天御剣流 継承者

魔法陣 ベルカ

魔力 EX

魔法ランク なし

魔法変化 風・雷

希少スキル 写輪眼・源の書

天御剣流 写輪眼 影分身 架設空間 武空術 瞬間移動 結界魔

法（AMF付き）治療魔法

ミナト

見た目はリンフォースと同じ 目と髪が違う（目 輪廻眼である

髪 赤）あとは原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 SSS

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル 輪廻眼

ユニゾンデバイス

治療魔法 検索 魔法コピー

プレシア・テストロッサ

原作と同じ（若いときの姿）

魔法陣 ミット

魔力 SSS

魔法ランク SSS

魔法変化 雷

希少スキル 次元攻撃

アリシア・テストロツサ

原作と同じで（フェイトの9歳の姿）
と違う服を着てる

間違いないようにフェイト

魔法陣 ミット

魔力 AAA

魔法ランク なし

魔法変化 雷

希少スキル 今のところはなし

フェイト・テストロツサ

原作と同じ

魔法陣 ミット

魔力 AAA

魔法ランク なし

魔法変化 雷

希少スキル ソニックブーム

アルフ

原作と同じ

魔法陣 ミット

魔力 A A
魔法ランク なし
魔法変化 なし
希少スキル なし
使い魔

高町なのは
原作と同じ

魔法陣 ミット

魔力 A A A

魔法ランク なし魔法変化 なし

希少スキル なし

砲撃魔法

ユーノ・スクライア
原作と同じ

魔法陣 ミット

魔力 A

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル なし

アリサ・バニングス
原作と同じ

月村 すすか

原作と同じ

ハラオウン 逮捕？

アルは、今日KYがくる準備をしてた

アル 「美沙斗さん」例の部隊と地元警官隊配置されました？」

美沙斗 「ほぼ完了らしいわよ」 本当に、アルちゃんの予言通り起きたから、

今まで最小限の被害ですんだわね」

アル 「こちらに14個 なのはちゃんが6個 あと1個公園のどこかにあるはずですよ」

最終確認して、フェイト&アルフ&アルの3人で、最後のジュエルシードを集めに向かった

公園に着くと、いきなりジュエルシードが発動してしまった、アルはすぐに結界魔法を発動させたので一時の被害もなくなった

フェイト 「バリアで防いだ」

アル 「なら、僕が倒すよ」

> 九頭龍閃くで速攻で倒した

フェイトが、封印が終わった頃なのは達がきた

なのは 「アルくん？」

アル 「何、なのはちゃん」

なのは 「何で、フェイトちゃんと一緒にいるの？」

アル 「仕事の協力者だよフェイトは」

アル 「今ので、ジュエルシードは最後のはずだよ」

ユーノ 「そんなはずがない」

アル 「こちらは、15個集めた なのはちゃんは6個でしょ」

なのは 「うん 何で、数がわかつたの？」

アル 「気づいてなかったの なのはちゃん達に監視者がいたのに」
なのは 「にあははは」

アル 「なのはちゃんはフェイトと、戦いするんでしょ？」

なのは 「そうなの」

アル 「「フェイト 頑張っ て なのはも頑張っ てね」
あとは、君にこれだ >ユーノにバインドをしたく」

ユーノ 「何をする」

なのは 「何でなの？」

アル 「君には不法侵入、危険連絡& amp; 報告、器物破損、強制民間協力違反で指名手配されてるのよ」

なのは 「なら、しかたないの」

アル 「なのはちゃん、 戦いの審判は僕がするよ」

なのは&a m p・フエイト 「お願い」

アル 「なら 始め」

なのはとフエイトが、武器同士がぶつかる瞬間にK Yが邪魔しに入ってきた

クロロ 「そこまでだ、時空管理局、時元航行艦、アースラ所属、クロロ・ハラウン執務官だ、速やかに武装解除し、投降しろ」

なのは&a m p・フエイト 「何？」

アル 「邪魔して その態度は何？」

クロロ 「ここでの、戦闘は危険すぎる」

なのはとフエイトがアルの横にきた

アル 「お前、許可書あるのか？」

クロロ 「そんな事は関係ない」

クロロが、アルにバインドしてきたのがわかったから アルは瞬間移動でクロロの後に移動した

アル 「で 次は公務執行妨害で逮捕か？」

クロロは、いきなり声がしたのにびっくりして、少し離れてアルに攻撃してきた

アルはそれをよけ

アル 「話しも聞かず逮捕か？ 管理局てものは礼儀しらずだな」

クロロは、いきなり色々な攻撃してきた

アルは、九頭龍閃で攻撃したらクロロは大怪我した 気絶する前にアルは、バインドをかけクロロの近く行き >合言キーを唱え< 「王の命より S2U 命令するまでモードリリース」

クロロの、デバイスが待機状態になった物をとりクロロのポケットに入れた

アル 「君には、不法侵入、危険行為、殺人未遂で逮捕になる。ちなみに、僕に逮捕の権利はないが捕獲は認められてますから」

アルは、クロロを抱え皆のいるどこに移動した

なのは& a m p・フエイトは何が、なんだかわからず苦笑してた

すると、目の前にディスプレイが表れそこには

リンディ 「待ってこないかしら 私はリンディ・ハラウン提

督です」

アル「なんですか？」

リンディ「クロロ執務官 いや私の息子を返して下さい 早く治療しないと」

アル「これの責任者の方？」

リンディ「はい」

アル「それは、できません 貴女も、追って同罪で逮捕状がでますから 今から、貴女達の艦の機動のみ停止させてもらいます」

アルは、クロロとユーノを部隊の人に預け 瞬間移動でアースラの手前に移動したそこで>合言キーを唱えく
「王の命より アースラ移動機能のみ停止」 アルは、部隊のところに戻り書類を受け取った

リンディ「今、何をしたのかしら？」

エイミイ「移動操作系だけ操作できません」

アル「逃げないようしたまですよ」

リンディ「話し聞きたいのでこちらに来てくれるかな？」

アル「貴女は、何言ってるの。 さっき、貴女達2人に逮捕状でましたよ」

アルは逮捕状を見せた

リンディ「けど、その前にジュエルシードを確保が先決なのでこれからは私達が全権持ちます」

アル「今頃きて、回収ふざけるな」

フェイト& amp; ;なのは「あゝ」

なのはとフェイトが、ジュエルシードを出した

リンディ 「これは」

アル 「ジュエルシードでよ 全部で21個 揃っています」

アル 「それでも 何か問題がありますか？」

リンディ 「で私は？」

アル 「とりあえず この書類の意味はわかりますよね？」

リンディ 「ええ」

アル 「貴女だけ こちらに来てください 貴女だけは 不法侵入は適用されないのでから こちらに書類にサインして下さい」

リンディ 「わかったわ」

リンディが転送魔法できて、サインして デバイスを預かり 近く
の警察署で取り調べをはじめた

三提督と取引

リンディ 「息子の、治療して下さい」

アル 「ちゃんと、話しできなら治療はしますよ」

アルは、クロロの取った行動をリンディに見せた

リンディ 「これは、クロロが悪いわね。 けど治療してくれば、私からお話「説教」しますから」

アル 「なら、しかたないから 治療はしますがバインドは残します」

アルは、クロロに治療魔法を掛けて直した

アル 「そのうち、気がつくと思います」

リンディ 「私達は、これからどうすれば？」

アル 「まずは、このデータを見てください」

ユーノ 「これは あのときの」

アル 「そう」

リンディ 「これは一体何？」

アル 「今回の事件 ジュエルシード全貌です」

ユーノ 「あれ、事故でなかったのか？」

アル 「そう。 この、戦艦は管理局のもですね？」

リンディ 「ええ」

アル 「あと、こつちらの書類を見てください」

リンディに、だけ見せた

リンディは、何も言えなくなっただけらしい

アル 「とりあえず ヤン提督 と この変装前のデータはこれか」
リンディ 「リーゼ姉妹だわ」

アル 「とりあえず その3人こちらに引き渡しもらいましょう
こちらに逮捕状と逮捕依頼状です」

リンディ 「私は、逮捕されてるのよね？」

アル 「貴女の、偉い方と連絡取って下さい その為に、貴女にこの情報見せたのですから」

リンディは、通信端末を使いアースラとつないで誰かと話をしてた

リンディ 「話しは、簡単に説明しました」

アル 「ありがとうございます」

アル 「息子さん、目さしましたよ」

リンディ 「ありがとうございます お話しとくからね」

アルは、モニター見たら三提督がいた

アル 「まずは、名前はアル・ロングといいます」

三提督 「今回は迷惑かけてすみませんね」

アル 「いえ 話してはあれなので 先にこの書類を見てください
どんどん色々書類を見せた で どうでしょう取引しません？」

リンディさんまでなら、すぐにお返しできますが？」

三提督 「3人渡さなくても？」

アル 「いえ、 渡してもらったら、お返ししますよ」

三提督 「なら、取引しますよ 戦争したくないし アルくんの、
知識は我々にはほしから 取引します」

アル 「でわ こちらも手続きは、しときますから 例の物は、引
き渡しの時でもいいですよ 守らなかつた潰しに行きますから」

三提督 「約束は守るよ」

通信が終わり、アルは手続きの変更書類を作りリンディさんのところ
に行った

アル 「まずは、リンディさん ジュエルシードは 僕が、完全封
印を終わってから お渡しします 万が一、今回と同じになっても
何も起きないよにしますから」

リンディ 「先ほどの話しは？」

アル 「息子さん、見たいでなくて助かりました、こちらの要求ど
うり手続きはしときましたから」

アル 「この、KYやろうまだ痛いところあるか？」

クロロ 「KYてなんだ？」

アル 「空気が読めない」

クロロ 「そうなのか？」

リンディ 「そうね」

クロロ 「む で痛いて言うかだるいかな」

アル 「やっぱりか それは疲れた 寝てれば直る」

アル 「あと、この部屋で取引が終わるまで2人で使ってくれ」

アル 「リンディさん、説明しといて下さい。 貴女達の手続き書類を集めないといけないので」

アルは、他の部屋に行きユーノとなのはがいるところに行った

アル 「ユーノの、処分は決まったよ」

なのは 「はいの」

アル 「まあね まずは、ジュエルシード 集めでの協力で減年だそうだ。 刑期は、なのはに魔法を最後まで教えること」

ユーノ 「それだけ？」

アル 「うん 器物破損は管理局が全部支払う事で話がついたあと、この書類にサインしろ。 サインすれば許可入国になる。

あと、砲撃魔法の練習したければ、うちに来れば部屋を貸すから」

なのは 「フェイトちゃんはどうなるの？」

アル 「？」

なのは 「捕まったの？」

アル 「先に家帰ったよ 一緒に暮らしてるから 手続き書類をあと学校に持って行くだけよ 仲良くしてあげてね」

なのは「そうなの」

アル「じゃ帰ろうか」

なのは&a m p・ユーノ「うん」

アルは、手続きの書類で徹底になりそうだったから、架設空間で書いた 美沙斗さんに、データを送り寝た

フェイト&a m p・アリシア 学校に行く(前書き)

アルの家はリビングがなく広いロビーをリビングがわりにしています

フェイト&アリシア 学校に行く

次の日

プレシアさんを、連れて学校に行った。フェイト&アリシアの、転入手続きの為である。試験は、なんとか面接だけでいいみたいだ。先生に、理由を言って昼から授業を受けれるようにしてもらった。プレシアさんを送り、アリシア&フェイトを、連れてこないで行けなかったからだ

そして、無事に面接が終わり 学校を簡単に案内してから送った

アルは、久しぶりの授業を受けに学校に行った

教室に入ると、アリサがノートを渡してきた

アル 「ありがとう 何で？」

アリサ 「親の仕事に関係者なんでしょ？」

アル 「なるほど 取引相手だよ」

アル 「なのはちゃん何？そんなに睨んで」

なのは 「何でもないの」

昼からの、授業が終わりアルは、なのはに念話を送りフェイト&mp;アリシアを紹介する為

アル 「一緒に帰らない、フェイトと話し、したいんでしょう？」
なのは 「一緒に帰るの」

家に着き

アル 「ただいま」
なのは 「お邪魔します」

ミナト 「お帰り 王様」

プレシア 「お帰り」

アリシア 「お帰り」

なのは 「フェイトちゃん こんにちは」

アリシア 「フェイトのお友達？」

なのは 「にあははは」

アル 「なのはちゃん、その子はフェイトのお姉さんだよ 双子なの」

なのは 「間違いて、ごめんなさいなの 私は高町 なのはていいます」

アリシア 「アリシア・テストロッサです」

アルフ 「お帰り」

フェイト 「お帰り なのは？」

なのは 「フェイトちゃん こんにちは」

フエイト 「こんにちは」

アル 「ほら 昨日邪魔者のせいで話できなかったでしょ だから連れてきた」

アルは、フエイト&フエイトなのはを連れて架設空間に行った

アル 「お互い ジュエルシード 出してね 封印するから」

なのは&フエイトは、ジュエルシードをアルに渡した

アル 「ここなら 戦っても平気だから」

アルは、庭に行き結界魔法を使い ミナトとユニゾンし、ジュエルシードを封印しだした

架設空間で、ただ話していたみたい そこで、アリシアがきてアリシア 「ただ話するならロビーですれば？」

なのは&フエイトは、アリシア言われたからロビーに行った

アルも、完全封印が終わったとこだった

ロビーで、皆で話し、しなが翠屋のケーキを食べた

アル 「なのはちゃんに、翠屋のケーキ出すのいけないよ」

アリシア&フェイト 「何で？」

アル 「なのはちゃんの家だからだよ」

なのは 「なんで知ってるの？」

アル 「士郎さんと知り合いだよ」

なのは 「そうなの？」

なのは&フェイト&アリシアは、仲良くなった

それから3日後

アリシア&フェイトが転入する日だ

先生 「今日は、皆さんに新しいお友達を紹介します」

アルは、その頃寝ていたクロロ事件で書類再足された為、寝てないのだ

先生 「先週、いきなりきました。海外からきましたでわ入って」

アリシア&フェイトが先生の横に立つ

先生 「この子達は アルくんの親戚です」

アリシア 「アリシア・テストロッサです よろしくね」
フェイト 「フェイト・テストロッサです 妹になります よろしく
お願いします」

アルは昼休みまでずっと寝てた

昼休みはアルは図書室で本を見てた

屋上では聖祥5美少女達が食事してた

アルの携帯になる

アル 「もしもし」

リンディ 「リンディです。 三提督が容疑者3人連れてきました。

いま、アースラで待機しています」

アル 「連絡ありがとうございます。 いまから向かいます」

夜天の書の邪魔者は先に捕まえよ？

リンディさんから連絡受け アルは、なのは& a m p・フエイトに
念話で「今から、アースラに行くからついでに2人のデバイスをメ
ンテナンスしてくれるらしいから持ってきて」アルは、先生に事情
を話し早退させてもらった

アルは、瞬間移動でアースラに移動した

アル 「エイミイさん、 お久しぶりです」

エイミイ 「久しぶり」

簡単に、挨拶し三提督の居る部屋に案内してくれた

エイミイ 「失礼します、アルくんが着ました」

中に入り エイミイの姿がないこと確認し取引の話をした

アル 「このカードがそちらの証明ですか？」

三提督 「そうだ」

アル 「この、データでかなり掃除できるが 今は、予言の通り、
自分は動き取れないから、掃除は三提督の君達でやってくれ」

三提督 「あとの リーセ、姉妹の事なんだけど 不穩侵入だけならなんとかならんか？」

アル 「罪状それだけです こちらを見て下さい」

三提督 「この子は？」

アル 「夜天の書 マスターになる子です」

三提督 「まさか」

アル 「多分 監察し 何かしようと しているかと」

アル 「リーセ、姉妹の、親玉探し態様しないと 被害が広がりがねない」

三提督 「探しだし リンディくに、仲介で形でいいか？」

アル 「それでいいよ」

取引の、話しが終わり メンテナンスルームに行った

アル 「マリエル・アテンザさんいますか？」

マリ 「はい？」

アル 「リンディから手紙です」

マリ 「なにになに」

マリ 「わかりました」

アル 「このデバイス2機です。 あと、このデータで その子達のパワーアップしてもらえないですか？」

マリ 「先にデータを確認」

マリーの、目がキラキラ光ってた

マリ 「これ本当にやるの？」

アル 「組んでくれるなら このデータは提供しますよ」

マリー 「やらせてもらいます けどこれ組むのに、艦長クラスの命令ないと・・・」

アル 「このカードじゃだめ？」

アルは、カードをみせたらマリーが敬礼しだした

マリー 「失礼しました すぐ、取りかかります」

アルは、カードの凄さ痛感した

アルは、罪人を確認して逮捕状を見せ、バインドして連行した

罪人と、引き替えにリンディのところに行き、リンディの最終手続きの、書類をだしてリンディさんのサインしてもらったの確認に自分のサインしてから担当者に確認してもらった

担当者 「手続きは完了です」

アル 「ありがとうございます」

アルは、リンディの元に行き話し、しようとしたら、またKYが邪魔しだしたから アルはカードを見せた

リンディとクロロは敬礼した

リンディ 「大将？」

クロロ 「失礼しました」

アル「リンディさん、今からの予言の事と三提督の取引の話します」

アルは、三提督との話しと掃除 デバイスとか 色々話した

アル「KYは、まだここで判決待ってる 新たな罪人二匹と一緒にだ」

クロロ「げりせ、姉妹」

アル「食べてもいいぞ」

そのまま、リンディとアースラに行き

デバイスを待った

マリ「お待たせしました」

アル「ありがとう」

マリ「材料揃い次第連絡しますね」

アル「はい」

アルは、アースラの移動機能解除した

アル 「エイミィさん、これ移動できるはずですよ」
エイミィ 「機能回復確認 移動できます」

アル 「リンディさん、連絡お待ちしてますね」
リンディ 「確実に」

アルは、瞬間移動で家に帰った

アースラも、三提督の指揮のもと移動した

クロロの判決

アルは、ここ数日学校休でいます。校長だけには、アルの裏の仕事を話していた

アルは、ジュエルシード事件での報告会議に主席する為である。

最初に、香港に行き美沙斗さんの所から始まり 今、イギリスに居るイギリスの、会議場所のホテルでアルは、クロロ達が暴れ誰も手に負えないって、連絡を受け イギリスの裏の代表と話し会議をずらしてもらった

アルは、クロロ達が監禁している場所に向かいながら クロロ達の判決書類を見ていた

管理局から、新しい自分専用通信端末をもらっていた為

アルが、クロロの判決の書類を見始めたら通信がきた

アル 「はい アルです」

リンディ 「リンディ・ハラオン提督です。 今、大丈夫でしょうか？」

アル 「平気ですよ あと、公式の場所以外は 普通でお願いします。 管理局の自分は、まだ極秘事項です」

リンディ 「わかりました 三提督から、リーセ、姉妹の指揮してた人物が見つかりました」

アル 「誰ですか？」

リンディ 「ギル・グレアムです 彼は前の闇の書事件を担当した者です」

アル 「闇の書？ あれは「夜天の書」だよ 夜天の書がなぜ、闇の書になったかのデータだ」

リンディに見せた

リンディ 「これ本当なんですか？」

アル 「ああ 元は、そこまで危険ではないのよ あとクロロの事なんだけど」

リンディ 「解放されるのかしら？」

アル 「いや、 暴れているみたいですよ。 せつかく判決出たのに、白紙になったんですよ。 あと、怪我人がでて、いるみたいなので抹殺の許可がきてます」

リンディが固まってる

アル 「リンディさん？ 話しは、聞こえてるね クロロの判決は謝罪金と街の奉仕活動3年と学校に行く事なんですよ。 学校は、仕事的に無理だと思ったから2ヶ月の留学でなんとかしたのに K Yめ」

リンディ 「なんとかならないかしら？」

アル 「まあ 謝罪金が今すぐ払うなら 白紙だけは なんとかできますが？」

リンディ 「すぐ払いますから それでお願いします」

アル 「わかりました けど 暴れた罰はそのばで、させてもらいます」

リンディ 「ええ」

アル 「では、またあとで詳細と作戦について連絡します」

アルは、暴れてる状態を聞き態様しに行った

アルは最初にヤンの所に行った

アル 「君の、判決を言う 無差別殺人及び無差別殺人未遂により
即刻死刑 です」

ヤンは、隠し持ってたデバイスを起動させた アルは、刀に魔法変化「風」を付け、 龍翔閃で斬った。 ヤンの、身体は真つ二つになり、血の噴水が起きアルは返り血を浴びた。 そのまま、クロロ達の所に行き、アルは本気で殺気を放ち リーセ、姉妹を「龍巻閃」「九頭龍閃」「土龍閃」で攻撃し虫の息にした。 クロロは、その攻撃の余波だけで、かなりの怪我をしたみたいだった

アル 「KYいや。 クロロ・ハラオン 君への、判決を言う。
謝罪金と街の、奉仕活動を3年と学校に行く事。 学校については2ヶ月の留学だけだ。 制服は管理局のでいいので、 あと謝罪金は、先ほどリンディさんが払ってくれたから。 学校と住まいが決

まるまで、ここで待機してくれ。 次、暴れたらリーセ、姉妹と同じになるからな」

アルは、シャワー浴びながらヤンの報告書を書いた

新しい服を、もらいロビーでお迎えが、くるまで待っていた。 アルは、シャワー浴びながらヤンの報告書を書いた

新しい服を、もらいロビーでお迎えが、くるまで待っていた。 ついでに、リンディさんと連絡し報告と作戦 クロロとリンディさんの罪についての補足をした「夜天の書、事件が起こったさい、アルの指揮のもと協力したら 減罪」

お迎えがきたから、移動しながら話し グレアムの会談が決まった「リーセ、姉妹が暴れたからだ」

アル 「今から、イギリスに向かってます」

アースラに、アルカンシエルが装備完了したそうなので、今からくるみたい

リンディ 「私は？」

アル 「グレアムの中には、同席で」

アルは、専用機でイギリスに向かった

ユーノの罪終わる

イギリスの、会議が終わり グレアムのことを、イギリス代表に聞いてみた

代表 「まさかね、 そんな事件があったとは 調べて書類送るよ」
アル 「ありがとうございます」

アルは、リンディさんが待つ部屋に向かった

部屋に、行くとリンディが敬礼してきた

アル 「だから、普通でお願いしますよ、リンディさん 初めまして、アル・ロングと言います」

グレアム 「ギル・グレアムです」

リンディ 「リーセ`姉妹は？」

アル 「ああ 特別病院にいるよ 怪我は地球の手当てだけしてます 全治2年だそうだ」

グレアム 「君は、何者なのだね？」

アル 「貴方に、教えられるのは このカードだけです」

グレアムは、青ざめていた

アル 「まあ、貴方のしてきた罪の一部用意してきてます」 「これは、貴方がリーセ、姉妹を使って、働いた物ですね？」

リンディ 「これは、一体なんなのかしら、グレアム提督？」

アルの、携帯がなり「部屋の外まで、書類を持ってきました」アルは、部屋の扉を開けて受け取った

アルは、その書類に目を通しグレアムの前に出した

アル 「これでも、貴方は黙秘するのですか？」

グレアム 「闇の書は、誰か、犠牲にならないとおわらんよ」

アル 「あれは、夜天の書と言い魔法を記憶するのであって、殺しの道具でない」「貴方のすることは、穴がある。何かで、封印し次元の狭間にでも、捨てるつもりだったんじゃないのか？」

グレアム 「そうだ」

アル 「そんなことをしても、悪党どもがやつきになって探し、封印を解除するだろう」「その責任は、誰が取るのかね？」

グレアム 「その時考えば……」

リンディ 「責任放棄ですか？」

アル 「まあ貴方には、この事件は何も出来ませんけどね」「前回の、不穏入国と昔の「夜天の書」事件で危険報告及び協力要請違反と無差別殺人及び無差別で器物破損で逮捕状でてます」

リンディ 「仕事早い？」

アル 「この、世界の未解決事件とこの事件を照らし合わせたらね」

リンディ 「なんなのかしら このムラムラは？」

アル 「まあ、リンディさんも被害ですから仕方ないですよ」

アル 「グレラムさん、貴方の財産一時、イギリス政府が差し押さえしましたから」 「管理局の罪の方は地球判決後処分を決めます。

この権は、リンディ提督に責任持つて判決出してください」 「
今から、ギル・グレラム 下記の通りにて逮捕します」

リンディ 「アルくん？逮捕権はないんです？」

アル 「今回の事件の態様と過去の事件で それだけの地位もありますよ」

グレラムを、引き渡しリンディは、アースラに戻った。 アルは、
アメリカに行き、プレシアで研究発表と特許申請してから海鳴に帰
った

家に戻って、フェイト達が架設空間にいたから向かったら
なのはが、フェイトに向けて「スターライトブレーカー」を放ってた
フェイトは、まともに当たり アリシアは余波だけ受け

フェイトは気絶し、 アリシアは、なのはを見て怯えてた「魔王回
避したと思ったのに何故？」 それを見たアルは、なのはに

アル 「スターライトブレイカー」

なのは 「にあは」

ユーノ 「なんで？」

なのはに、まともに当たり気絶しました

アル 「コピーしたからだ、うちの家族にトラウマをつけてくれたからだ」

ユーノ 「それは 言える」

ユーノ 「話しが、あるんだけど」

アル 「なのはに、告白か？」

ユーノ 「違うよ 僕の罪だよ」

アル 「で？」

ユーノ 「基礎は、全部教えた」

アル 「なるほど ユーノは、このあとはどおするのだ？」

ユーノ 「また、同じ生活だけだよ」

アル 「なのはと、離れてどおするのだ？ あれなら、管理局の仕事しないか？ ユーノのピツタリ場所があるから」

ユーノ 「何故？君が？」

アル 「ユーノは、管理局の罪はまだ何もしてないでしょ リンデイさんからの伝言だ」

なのはとフェイトが気がついた

フェイトは、なのは見て泣き出した
なのはは、アルを見て震えてた

アル 「「フェイト」「アリシア」

敵は、とつたから機嫌直せ」

なのは 「なんでなの？」

アル 「そんなことを言うなら・・・」「ごめんなさい」「
なのはが、慌てて謝ってきた

アル 「なのはちゃんとアリシア フェイト ユーノ 今からア
スラに行くよ」

アースラに、着いたらリンディさんが来て

リンディ 「いらっしやい」

アル 「ユーノに、例の事お願いします」

リンディ 「わかったわ ユーノくん行きましょう」

アル 「アリシア達はこっだ」

アルは、マリーさんのところに向かった

アル 「マリーさん、お久しぶりです 例のことで来ました」

マリー 「すぐ終わるから待っててね」

アルは、アリシア達に話して マリーさんに、任してアルは部屋を出て、リンディさんのところに行った

アル 「リンディさん話しは？」

リンディ 「ついたわ」

ユーノは、無限書庫で今回、事件の書類と闇の書、事件資料検索が管理局からの処分だった

美人・美少女 集まると店はパニック？

アル 「リンディさん、明後日奉仕活動ですからね」

リンディ 「わかったわ 住まいの手配は先ほど終ったわよ」

アル 「明日にでも、クロロを行かせましょう」

マリーさんからの、連絡を受けアルは向かいに向かった

アル 「マリーさん、ありがとうございました」

マリー 「いえいえ」

アリシア 「アルちゃん、デバイス ありがとう」

アル 「うん」

アリシア 「アルちゃん」

アル 「ん？」

何故かアリシアが怒っていた

アリサ 「今日の学校帰りでもいい？」 「わかったわ」

アリサ 「アルくん、帰り家に来て欲しいそうよ 頼みごと？」

アル 「前から、新たな契約したいって、連絡あったのね 忙しく

てやっと、その話しが出来るんだけど」

アリサ 「反対だったのね だから慌ててたんだ 納得」

授業が終わると

アリサ 「お迎え来てるから、さっさと帰るわよ」

なんと、リムジンが待機してた

アルは、美少女達に囲まれてリムジンに押し込まれた

アルは、トイレに行きたかっただけなのに

アリサ家に着くと、アルは真っ先トイレに向かった 美少女達は罪悪感を感じてたらしい

アルは、仕事の話しアリサ達はお茶してた

アル 「フェイト アリシア 先帰るね」

アリシア 「私も一緒帰るね」

アル 「ダメ 寄るところあるから」

アリシア 「どこ？」

アル 「士郎さんに会いに」

それ聞いた、なのはは、紅茶を吹いた

なのは 「お父さんに、なんの用事なの？」

アルは念話で「今回の事件のお礼の挨拶だよ」

アル 「明日の事だよ」

なのはも念話で「え 事件の事なぜなの？」

アル「御神流も、同じ組織なんだよ。 世界的規模の事件が、あれば僕とか、御神流の人が動くの」「魔法の事は、知らないけど関わったのは、ばれてるからね」

なのは「にあははは」

アリサ 「明日、何かあるの？」

なのは 「忘れたなの？アリサちゃん すずかちゃん フェイトちゃん アリシアちゃん ミナトさん リンディさん 私 お姉ちゃん お母さん プレシアさんで翠屋で、働くなの テレビがくるから、働かせて、言ったのアリサちゃんなの」

アリサ 「そうだったわね」

すずか 「お姉ちゃんも、行くみたいよ」

アル 「おい おい テレビは、聞いてないよ」

アルは、現状把握の為に瞬間移動で移動した

アルは、翠屋に行くと

士郎 「久しぶりだね」

アル 「ですね 明日の事何ですが テレビは、聞いてないですよ
リンディさんはいちようは罪人に当たります」

士郎 「テレビいる時は、厨房の方にいらいます」

アル 「この奉仕で、リンディさんは、息子の軽減なることを取引
をしてるんですよ 美沙斗さんとね」 「あまり、勝手なことする
と 御神て事ばれますよ」

士郎 「それはまずいなあ」

アル 「あと、僕も士郎さんと同じ権限もらえましたから」

アル 「桃子さん いつも美人で若いですね」

アルは、きたついでにお土産を買って帰った

次の日

アルは、朝起きてたら誰もいなかった　ちなみにA M 0 6 : 3 0 だ

アルは、念話でアリシアに「皆どこ、行ったの？」アリシアは「なのはちゃん家で、衣装合わせて」アルは呆れて「あっそう」と答えた

アルは、朝ご飯を作り、台所に行きある物が？何もなかった

アル「女4人いて、これはどうなのか」

アルは、スーパーが開くまでもう一眠りした

アルは、起きて今から行けば開店ぐらいだな

アルは近くの、スーパーに買い物に行った

買いだめと、保存食を買った、ちなみアルは見た目、子供で荷物が
あり得ないぐらいだった　帰りはタクシーをよんで帰った

買い物の、整理が終わると昼過ぎだった

アルは、作くるのを諦め食べに行く為、翠屋に行った

行く途中でミナトに会い

ミナト 「王様、どこに行くんですか？」

アル 「翠屋だよ」

ミナト 「こないで下さい」

アル 「何でだよ？」

ミナト 「あれ、見てください」

アル 「人が並んでるね」

ミナト 「この人達は、翠屋のお客さんなのよ」

アル 「まじか」

それも、そのはずだ翠屋まで500m以上先なのだ 食事は諦め、
リンディさんの仕事振りを見て聞いて、報告しないといけないから、
それだけ様子見に行った

店の前で、美少女達が入場整理しているつもりか？
端からみたら、客寄せになってるよあれは

近くに行き、なのはに声をかけ、中に入れてもらった

中も、パニックになってる 桃子さんに話し一緒に、厨房に入り、リンディさんの話を聞いてあとは、今の外の状態説明したら嬉しいやら悲しいやら だから外をリンディさんとプレシアさんでレジをミナトで美少女達は厨房とかたずけしたら

アルは、アドバイスだけして逃げた

アルは、コンビニに行き簡単な物を買って公園食べていた

夕方には、パニックは収まっていた

フェイトから、念話が出て「翠屋きて欲しい」アルは、夕食の準備を終わらせていたから「家に来るように」伝えた

食事が、おわりアルはいつもどおり、架設空間で今回の事件の最後報告書を書き 刀で練習をしていた

そこに、なのはと恭也が出て

なのは 「綺麗なの」

アル 「なにが？」

なのは 「アルくんがなの」

図書館で美少女を見かける

アル 「何か誤解する発言しないの」

恭也 「僕と勝負しないか？」

アル 「士郎さんから聞いてないのですか？」

恭也 「何も聞いてないけど」

アル 「士郎さんから話し聞いてからにしないか？」

プレシアさんが来て

プレシア 「アルちゃん、ちょっといいかしら？」

アル 「何？」

プレシア 「例の資料は何処にあるの？」

アル 「あの資料はまだ整理していません」

アル 「もう、そこまで進みましたか？」

プレシア 「ええ」

アル 「今から用意しますよ」

そう、言い残しアルは、地下研究室で資料整理をやりだした

なのは& a m p・恭也は、士郎に話しを聞く為に、士郎の所に向かった

なのは 「お父さん、アルくんの事で、聞きたい事あるんだけど」

士郎 「何かな」

なのは 「アルくんは、お父さんとどんな関係なの？」

士郎 「約1年前に、お父さんが、用事で香港に行つときに、アルくんが特殊部隊と訓練してるの見てね、アルくんに、試合を申し込んだ、ただだよ」

恭也 「父さんが勝つた、だろう？」

士郎 「相討ちだったみたいよ」

なのは 「アルくん、強いなの？」

士郎 「強いよ、噂なんだけど、2歳の時に古流 飛天御剣流 継承者になつた子だよ」

恭也 「聞いたことない、流派だね」

士郎 「今、飛天御剣流は2人しかいないらしい」

なのは 「アルくんは、速くて相手をいつ斬つたのかわからないなの」

士郎 「神速の抜刀術だからね。 なのはに、見えないのは当たり前だよ」

士郎 「アルくんの刀は、逆刀で1メートルあるみたい」

恭也 「ありえない」

士郎 「触らして、もらったことがあるから否定出来ないよ」

士郎 「恭也、試合申し込んでもいいが、命の保証がないよ」

恭也 「だから、父さんに話し、聞いてからなのか」

なのは 「アルくん、優しいなの」

アルは、地下でフェイトとアリシアの、魔力を見ていた

アル 「フェイト、ありがとう」

フェイト 「たいしたことでないよ」

アル 「アリシア、何が違うか、わかった？」

アリシア 「全然、なんなの？」

アル 「溜めとバランスだよ。見た感じは、同じでも、バランスがよくないと飛べないよ」

アルは、フェイトに皆に今日は、遅いから泊まるように言ってきてもらった

アルは、皆が寝た頃、皆の、朝ご飯を作ってた

その後、架設空間で訓練しだした

次の日

アルは、架設空間の中で倒れるのを、アリシアに発見され、ちょっとした騒ぎになった

ミナト 「最近、無茶しすぎです」

アル 「ごめん、ミナトあとで、いつものやってくれ」

ミナト 「わかりました、王様」

2人になった、ところで、ミナトの、回復魔法をしてもらった

その後、アルは調べ物をしに、図書館に行った

アル 「美人な、お姉さん、この資料が参考書は、どこに置いてありますか？」

受付 「案内してあげるわよ」

受付の人は、にこにこしながら案内してくれて、席まで確保してくれた
アル 「ありがとうございます」

受付 「ごゆっくり」

アルは、周りから見えないようにし、通信端末を使い、調べ物をしていた

アルは、資料を片付け、参考書を戻し、次の資料を探してた

アルは、本棚の一番下の棚を、しゃがんで見てたら、車椅子に引かれた

美少女 「ごめんなさい」

アル 「大丈夫ですから、どちらかに動いて下さい」

アルは、本棚と車椅子に、サンドイッチの型になってた

美少女 「上の方を、見てたから気付かなかった」

アル 「いや、意外と引かれると痛いね」

美少女 「ホンマ、怪我してへん？」

アル 「怪我はないけど、身体が痺れてるだけだよ」

アル 「そんな顔したら、せつかくの美少女が台無しだよ」

美少女 「美少女なんておおきに。私、八神 はやて です」

アル 「アル・ロングです」

はやて 「なんか、お詫びしたいから アルくん？」

アル 「あ、ごめん なら、家に送ってくれると助かる。まだ、痺れてるから、歩けそうにないから」

はやて 「そんなんでもいいなら 送るよ」

アル 「けど、坂があるから タクシーで、お願いします。お金は心配ないから、昼は家で食べてね」

はやては、タクシーを呼んでくれて、2人は家へ向かった

キャラ 設定

高町 恭也
原作と同じ

リーゼアリア
原作と同じ

リーゼロツテ
原作と同じ

ギル・グレアム
原作と同じ

エイミィ・リミエッタ原作と同じ

マリエル・アテンザ
原作と同じ

リンディ・ハラオウン
原作と同じ

魔法陣 ミット
魔力 SS

魔法ランク SS
魔法変化 ?
希少スキル ?

クロロ・ハラオウン

原作と同じ

魔法陣 ミット

魔力 AA

魔法ランク AAA

魔法変化 なし

希少スキル なし

原作ではクロロ・ハラオウンです。

オリジナルキャラ>アル<がクロノって難しいくて>クロロ<で発言なので、混乱しないように共通にしました。
あえて名前を少し替えさせてもらいました。

八神 はやて

原作と同じ

魔法陣 ベルカ&ミット

魔力 S

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル 夜天の書

はやての治療計画

アルは、受付の人に乘せもらい、はやては運転士さんに乗せられ、運転士に道教えようとしたら

運転士 「お久しぶりだね」

アル 「？」

運転士 「こないだ、大荷物で乗ったじゃない」

アル 「あのときの、なら道わかりますよね？」

運転士 「はい」

あとは、ミナトに念話し玄関でまたせた

お金を払い、はやてを見たら固まっていた

アル 「はやてちゃん？」

はやて 「お金持ちなんやね」

アル 「普通だよ」

ミナト 「まあ、中に入りましょう」

ロビーに行き、皆が居たから紹介した

プレシア 「プレシア・テストロッサ です。ここで、アルくんの研究の助手をしています。」

アリシア 「アリシア・テストロッサ です」

フェイト 「フェイト・テストロッサ です。この小型犬はアルフです」

ミナト 「ミナト です」

はやて 「八神 はやて いいます」

アリシア 「同じくらいだよ、何年生？」

はやて 「学校行ったこと、ないいんよ。だいたい3年生くらいだよ」アリシア 「ごめんなさい」

はやて 「気にせんとって」

フェイト 「なら同じだね」

アリシア 「誕生日はいつ？」

はやて 「6月4日や」

アル 「明後日か」

フェイト 「なのは達呼んで誕生日パーティーしよ」

アリシア 「メールで送信と」

はやて 「はや」

アル 「はやてちゃんの、足は全然動かないの？」

はやて 「うん」

アル 「ミナト、簡単に診察して」

ミナト 「わかりました、王様。はやてちゃん、動かないでね、そのままで、診れるから」

プレシア 「大丈夫よ、私とアリシアを、アルくんが、治療して治してくれたのよ」

アリシア 「アルちゃんを信じて」

はやて 「ほんまに？」

フェイト 「アルちゃんは、医師の資格持つてるのよ。」

ミナト 「これは、例のあれですね」

アル 「そっか。プレシアさん、準備ができしだい、時の庭園を使わせてもらいます。」

プレシア 「ええ」

アル 「ミナト はやてちゃんに、説明しといて。薬を作ってくるから」

ミナト 「わかりました、王様。」

ミナトは、いきなり「源の書」を出した

ミナト 「はやてちゃん、これと似た本持っていないですか？」

はやて 「ある」

ミナトは、最初は簡単に説明することにした

はやてちゃんの持つてる本は「夜天の書」ていいいます。でも、今は「闇の書」と呼ばれてます。

まずは、はやてちゃんは魔法使いです。

安心して下さい。ここに居る人、全員魔法使いです。

ミナト 「ここまでで、質問は？」

はやて 「治療の話は？」

ミナト 「その前に、今のことを、知ってないと説明しても納得しないと思います」

はやて 「なら、続けて下さい」

まず、足の病気は、闇の書により、浸食されることで足の麻痺から心臓までいきます。いくつか、治療はありますが、それは王様が判断します。それに対して治療するさい、しばらくこの家で暮らして下さい。そのさい、着替えと夜天の書を持って来てください。今日

からで宜しいですか？。

はやて 「お金は？」

アル 「身体で？これ飲んで」

はやて 「？」

アル 「本気にしないの、お金はいらないよ。だけど、夜天の書のことと契約してもらうけどね」

アル 「契約はあとでもいいし」

はやて 「お願いします」

アル 「ミナト、はやてちゃんと一緒行つて来て、タクシーを待たせてるから」

アルは、リンディと連絡を取り計画を始めた

フェイトとアリシアも、架設空間で訓練をやりだした

プレシアは、部屋の準備してた

アルフは、無限書庫に行った。ユーノの手伝いと資料をもらうためだ

ミナトとはやてが、帰ってきて食事しながら夜天の書のことを話した

ヴォルケンリッター登場

はやては

今は、プレシアさんに型どりする為、全裸にされ、気持ち悪い液体を、首から下に全体的塗られていた

はやて 「ちょっと、そんなとこまで」

はやて 「そこは、堪忍や…」

プレシア 「これ、塗らないと、治療が遅れるけど・・・仕方ないかしら。アルくんに、作業してもらうしかないけどいいかしら？」

はやて 「違う、治療？」

プレシア 「まだ、治療すら始まってないわよ。この作業をアルくんに任せていい？お嫁さんに行けないわよ。アルくんにはやてちゃん全裸と生肌を触られんだから」

はやては、その言葉を聞いて、顔が真っ赤になった。

プレシア 「本当は、この作業は、アルくんが作業してら、一瞬で終わるのよね。アルくんは、はやてちゃんの未来の為、私が作業してるのよ」

はやて 「ごめんなさい」

プレシア 「いいわよ、だけど、これは！ はやてちゃん、このキズは、いつから？」

はやて 「朝には、なかったです。」

プレシア 「これ、アルくんに見てもらわないと行けないわよ。ついでに作業も、してもらうしかないね」

プレシアさんが、念話でアルを呼んだ。

はやては、アルに全裸を見られて気絶した

アルは、キズの手当てし、はやての身体を石膏で型を作った。あとは固まれば治療を始められる。

ミナトが、はやての様子を見に来て、石膏はあと少しだね。

ミナト 「はやてちゃん、気がついた？」

はやて 「あれ、身体が重いし、動かない？」

ミナト 「あと少しだから、動かないの。最初に身体に塗った液体は、美肌効果あるからね。」

ミナトはアルに連絡した

アルが、きて

石膏専用ナイフを使い、はやてを出した。

はやて 「責任とつてよ」

アル 「まだ、治療すらしてないよ。」

はやて 「私の裸見たからやー!」

ミナト 「医師は、見たくない、裸を見ることがあるんです。王様は、はやてちゃんを助きたいから治療を始めたんです。はやてちゃんは、服着た状態で治療できるんですか？」

はやて 「無理だわ」

ミナト 「今は、王様は医師です。わざと、見た訳じゃないし。だから最初は、プレシアさんが、作業したんじゃないんですか？」

はやて 「確かに」

アル 「その辺で、いいだろう」

アルは壁を見たまま喋っていた

アル 「プレシアさん、はやてを何とかして」
はやて 「虫みたいに、言わないでよ」

プレシア 「はやてちゃん何か着たら？」

そう、はやては、裸で騒いでいたのだ

はやて 「きゃー!？」

フェイトとアリシアがはやてを風呂に連れていってくれた。

アルは、石膏を使い、はやての模型を作った。

プレシアさんはアルに、頼まれた薬を作っていた

ミナトは、無限書庫に治療の参考又は文献を探しに行った。

はやて達が、風呂を上がったの確認、はやてに薬を飲ませた。

次の日

フェイトとアリシアは学校に行った。

アルは休んで、研究と夜天の書の態様の書類を作っていた。

アルとプレシアは、昨日から寝ないで、作業してた。
はやては、昨日の薬が体質的に良かったのか。未だに寝てる。
ちなみにAM11:30だ

昼頃、アルフとミナトが、帰ってきた

アルフ 「これは、無限書庫で、これが三提督から」

ミナト 「情報は少ないが、これを応用すれば、王様の腕なら成功しますよ」

アルは、倒れた

ミナトの診断で空腹が原因だった

同じ頃、プレシアも倒れてた。こちらは、寝不足が原因だった。

はやては、昼頃目覚め

はやては「無理はあかんよ」と言ったらしい

アルフ 「倒れたのは、あんたの治療の為だろうが」

はやて 「そんなに、大変なことだったなんて」

ミナト 「はやてちゃん治療は一刻をようするんですよ。手術は命に関わるんですよ。」

ミナト 「あと、今日のAM00:00前後、はやてちゃんのリンカーコアが覚醒するはずですよ。」

はやて 「なんで、そんなことわかるん？」

ミナト 「私、源の書の管制人格です。あと、ユニゾンデバイスでもあります」

はやて 「わからんわ」

ミナト 「夜天の書は源の書を基準として作りました。私の妹が夜天の書の管制人格です。」

はやて 「なるほど」

ミナト 「あと、夜天の書には、守護騎士システムがあり、その騎士達を、ヴォルケンリッターです」

はやて 「なんとなく、わかたわ。昨日の、お詫びとお世話になってるから、うちが家事やらせてもらいます。」

ミナト 「食事だけお願いします。研究とかで、触られたくない物もありますから」

夕食は、はやての料理を食べた

今日の夜は、ヴォルケンリッターだから

はやてと一緒に、寝て待った。ミナトも一緒にだ「ユニゾンした状態だ」

AM00:00

「夜天の書」起動を確認しました

はやては起き、突然ヴォルケンリッターが登場した

はやては、固まった

アル「やっと、出てきたか」

逆刀折れる（前書き）

お詫び

1つ この作品は携帯でしてます。

その為、確認画面で文字化けし、なかなか修正が出来ませんでした。昨日、やっと確認画面だけは文字化けは、直りましたが。

確認画面と修正画面が違い、おかしい修正になってると思います。まだ、記号とか文字化けし、修正の連続です。

1つ 作者は表現力や構成・漢字、等勉強中です。

1つ 感想・指摘・アドバイス等 書いてくれて嬉しいですが、携帯の容量が、足りないのか設定なのか、わからず。

ごく、一部エラーや通信拒否等で感想が見れません。

見れるように、今やってます。見れるようになれば返信したいと思います。

逆刀折れる

ミナト 「王様、起きて下さい」

「夜天の書」起動、確認しました。

夜天の書が、光だし

はやてのリンカーコアから魔力を吸収しだした。

そして、魔法陣が展開され、ヴォルケンリッター登場です。

烈火の将「シグナム」 「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

風の癒し手「シャマル」 「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

蒼き狼「ザフィーラ」 「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

紅の鉄騎「ヴィータ」 「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

はやては、気絶中。

アル 「いちよう、聞くが管制人格と話しできるか？」

紅の鉄騎 「てめえは、誰だ？」

烈火の将 「怪しいやつ」

ミナト 「王様、昔のヴォルケンリッターより、質が悪くなってるね」

アル&ミナト 「ユニゾン・アウト」

ヴォルケンリッターは固まった

ミナト 「久しぶりだね、騎士達。」

烈火の将 「誰だ」

紅の鉄騎 「なんで、管制人格があいつと、ユニゾンしてんだ？」

蒼き狼 「我々の管制人格では、ないな」

ミナト 「蒼き狼は、気がついた？」

ミナト 「風の癒し手」

ミナト 「私のこと、捨てたのね」「忘れたのね」？」

風の癒し手 「あわあわ」

風の癒し手は混乱していた

アル 「そう、苛めるなよ。
話が進まんだろうが」

ミナト 「ごめんなさい、王様」

風の癒し手 「王様？ ユニゾンデバイス、もしかして。
「源の書」の管制人格？」

ミナト 「やっと、思いだしたか。元、この「源の書」騎士め」

風の癒し手 「この子が、マスター？」

ミナト 「そうだ」

烈火の将 & a m p ; 紅の鉄騎 「それがどうした？
我々には、関係ないことだ」

はやて 「ん」

はやての、お目覚め

アル 「気がついた？」

ヴォルケンリッター 「主、我々に命令を」

はやて 「えーと、何が？何で？この人達は？ようわからんよ」

ミナト 「まずは、落ちっこうか。

はやてちゃん、簡単に説明ね。

はやてちゃんが寝てるときに、夜天の書が起動したのね。

起動したときに、はやてちゃんの魔力を吸収したのね。

そうしたら、ヴォルケンリッターの登場です。

はやてちゃんは起動したときに、起きたときに魔力を吸収され気絶したのね」

はやて 「そうなんや」

ミナトは、ヴォルケンリッターを紹介しだした。

ピンクの髪が、烈火の将

一番小さいのが、紅の鉄騎

犬の耳ついてるのが、蒼き狼

料理の下手な、風の癒し手

アル 「まあ、ヴォルケンリッターよ
警戒と殺気はやめてくれないか？」

烈火の将 「さつきから、我々の管制人格と同じ。
呼びかただな」

紅の鉄騎 「私達には、名前がある。
ヴィータだ」

烈火の将 「シグナムだ」

蒼き狼 「ザフィーラだ」

風の癒し手 「シャルです」

はやて 「シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャル
とりあえず、アルくんの言うこと聞こうか。
命令や」

アル 「騎士達、今から管制人格を呼べるか？」

シャル 「闇の書は、2 / 3 ページ以上も集めないと呼べなかつ
たと思います」

はやて 「闇の書？」

シグナム 「はい、主」

ヴィータ 「闇の書の収集を」

シグナム 「なんなりとご命令を」

アル 「はやてちゃん、夜天の書をこちらに」

はやて 「シグナム、夜天の書をアルくんに」

シグナム 「それは、主の命令でも従えません。
この者は、信用出来ません」

はやて 「ウチの病気を、治してくれる人なんよ」

はやて 「どうしたら、信用してくれるん？」

シグナム 「私に、勝てたら信用しましょう」

ミナト 「本当にするのか？」

シグナム 「騎士に、二言ない」

アル 「ミナト、夜天の書も「合言キー」通じるの？」

ミナト 「はい、王様
王様が作りし物ですから」

シャル 「源の書の管制人格が、ミナトさん？」

ミナト 「なんだ、風の癒し手」

シャル 「アルくんは、ただのマスターだよね？」

ミナト 「私は、王様の魂がなければ。
起動しないように、プログラムされてる」

シャル 「シグナム、アルくんと、決闘したらいけない。」

アル 「それは、わからんよ」

アル 「烈火の将、狭いが訓練所に行こうか。
魔法使っても、平気だから」

アル・はやて・ミナト・ヴォルケンリッターは、架設空間に向かった。

アルとシグナムは中に入り

シグナムは、デバイス「レヴァンティン」を起動させ
鞘から剣を、抜いた

アルも鞘から刀を抜いた

アル 「合図は、お互いに間合いが合ったときでいいか？」

シグナム 「ああ」

その言葉のあと、しばらく沈黙した
先に、動いたのはシグナムだった。

シグナムは最初、力を確かめようと普通に斬りかかった。

シグナムが、力を入れてアルに斬りかかった、

アルは受け止めようとして刀を受け止る位置に構えた。

お互いに、剣と刀がぶつかり合い「キーン」て音になり、そのあと
「ドンー」と音がした。

それは、アルの逆刀が折れた音だったのだ。

アルは、折れた残りを投げ捨て。

アルは、シグナムの方に左手を向けて、魔法陣が出て

アル 「デバイン バスター」

魔法を撃った

シグナムは「パンツァーシルト」で防いだ

パンツァーシルトで防いだと思ったら、シグナムは、バインドされた。

アルはデバインバスターを囿として使ったのだ

アル 「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。貫け！閃光！ スターライト・ブレイカー！」

シグナムは、まともに当たり気絶した。

逆刀の替わりの準備

シャマル 「大変、シグナムが。
だから、言ったのに。」

アル 「気絶した、だけだ」

ヴィータが、折れた逆刀を拾い「刃の方」、持ち上げた。

ヴィータ 「なんだ、見た目より、かなり重いぞ」

アル 「折れる前は、1tあったからな」

はやて 「シグナムは、死んだんか？」

シャマル 「気絶してるだけです。はやてちゃん」

ミナト 「治療しないのか？」

シャマル 「クラールヴィントお願いね」

シャマル 「はやてちゃんも手当てしよう」

ミナト 「風の癒し手、お前では、治せん」

ミナト 「私と王様が、ユニゾンしても」今の状態だと」治せん」

アル 「とりあえず、はやてちゃんは部屋に戻って寝なさい」

アル 「ヴォルケンリッターは、今日のところはロビーで寝てくれ。昼頃には、部屋を用意するから」

はやて 「はい」

アル 「風の癒し手、烈火の将が起きたら、風呂に入れる」

アルは、今からのことを考えた。
刀を作るには時間がなさすぎる。

ミナト 「王様、何か飲み物、お持ちしましょう。
何がほしいですか？」

アル 「紅茶で」

ミナト 「王様、お待たせしました」

アル 「ありがとう」

ミナト 「刀が折れてしまいましたね」

アル 「だね」

アル 「闇との戦い前で、よかったのかもね。
そう、考えたら運が、よかったのかもね」

アル 「折れた、場所の断面みたら、僅かだが空洞があったよ」

アル 「「ミナト」 デバイス「源の書」起動で、シグナムのようにできる？・・・今回みたいに、折れると、どうしようないからね」

ミナト 「現段階では、できませんが。

夜天の書みたいに「アームドデバイス」を組み込めば可能です」

アル 「「ミナト」 部品の型番を揃えくれ。

マリーさんに、材料集めてもらってから」

ミナト 「揃えて、マリーさんにデータで送って、おきますから。
あとで、連絡入れといて下さい」

アル 「わかった。ありがとう」

そして朝方、アルは台所で朝食を作っていた。

アル 「あとは、食べる前であればいいか」

アルは、架設空間に向かった。

フェイトとアリシアの練習に付き合う為に。

アルは、アリシア達がくるまで。瞑想をした。

フェイト & a m p ; アリシア 「アルくん、おはよう」

アル 「おはよう」

アル 「「アリシア」飛べるようになった？」

アリシア 「なったわよ。まだ、速く飛べるのは無理だけどね」

アル 「2人とも、僕が魔法で攻撃するから飛行でかわしてね。
飛んだら、攻撃するから」

アリシア& a m p ;フェイト 「はい」

アリシアとフェイトは飛びだした。

アルは「フォトンランサー」で攻撃しだした。

アル 「「アリシア」避けれそうに、なければ「プロテクション」
を使え」

アリシア 「はい」

アルは、フォトンランサーを止め。

自分も、いろいろな魔法に慣れるように、なのはの魔法にした。

アル 「リリカルマジカル 福音たる輝き、この手に来たれ。導き
のもと、鳴り響け。ディバインシューター、シュート！」

アル 「この、魔法は簡単そうに見えたけど。
集中力をつけないと、使えんなあ」

アル 「よし、朝の練習を終わろう」

アリシア& a m p・フェイト 「ありがとう」

アル 「シャワーを浴びて、おいで」

アリシア& a m p・フェイト 「はい」

アルは台所に行くと、はやてが朝食の続きしてくれてた。

はやて 「おはよう」

アル 「おはよう」

アル 「続き、やってくれたんだね」

はやて 「これ、アルくんが作ったんか」

アル 「僕がいるときは、たいてい僕が作ってるよ」

アル 「あと、任せてもいい？」

はやて 「いいよ」

アル 「ありがとう、電話するところがあるから」

自分以外、揃ったらたべていいよ」

アルは、紅茶を持って通信しに行った。

アル 「マリーさん、おはようございます」

マリー 「アルくん、おはよう」

アル 「先ほど、データを、送ったの見て、くれました？」

マリー 「ちょっと、待ってね。」

あつた、あつた。え〜と、デバイスを作ればいいの？」

アル 「部品だけで。お願いしたいのですが、全部揃いそうですか？
請求書は三提督でいいので、早めをお願いします」

マリー 「本当に、組まなくてもいいの？
値段が高くて、いいなら3日あれば揃えるわよ」

アル 「ええ、自分のデバイスの中に、組み込むので部品だけをお願いします。」

それは、仕方がないけど、なるべく安くなるべくようにお願いします」

マリー 「揃ったら、連絡します」

アル 「お願いします。」

アルは、マリーと連絡が終わり。

リンディに、連絡入れる前に、デバイスの報告書を作った。

アル 「リンディさん、おはようございます。」

リンディ 「アルくん、おはよう。」

朝から何かしら?」

アル 「まず。夜天の書は、昨日の夜に起動しました。
詳細は、こちらのデータを。」

リンディ 「なるほどね」

アル 「そのとき、愛刀が折れました。
その為、今マリーさんに、デバイスの部品を集めてもらってます。
その、報告書です。これを三提督に送っというて下さい」

リンディ 「あと、少しで予定位置に到着です。」

アル 「なら、着きしだい。第2段階でお願いします。
また、連絡します」

リンディ 「わかったわ」

そして、アルは皆がいるところに行き。

はやて 「皆の紹介おわったよ」

ミナト 「王様。夜天の書はプログラムを変えられてますね」

アル 「それで、ヴォルケンリッターには。
説明した、みたいだな」

アルはヴォルケンリッターを見れば、昨日と違うからだ。

ミナト 「王様、管制人格を呼び出せなくとも。
話しをできるようにしました。＞合言キー＜で」

アル 「はやてちゃん」

はやて 「なんや？」

アル 「夜天の書の管制人格には、まだ名前がないから、つけてあげてね」

はやて 「それは、可哀想だわ。
わかったで、考えとくわ」

アル 「プレシアさん、例の石膏と模型は出来ていますから。例の
実験お願いします」

プレシア 「わかったわ」

シグナム 「主の為に、何をしたらいい？」

アル 「ヴォルケンリッターにも、やってほしいことがあるから。
少し待ってくれ。計画や準備の手配が先だ」

アル 「アルフ、ユーノからのデータは？」

アルフ 「帰ってから、バタバタしたせいで、忘れてたわ。
今から、送るよ」

アル 「ミナトのデータと、このデータで確率上がりそうだな。
この、データの薬草とか調べてくれ」

ミナト 「王様、調べてから採ってきます」

アル 「行くなら、紅の鉄騎と蒼き狼を連れて行け」

ミナト 「了解、王様」

レイジングハートとバルディッシュ 新たな力

アルは、朝食を食べながら計画と準備をした。

アル 「烈火の将は、「アリシア」「フェイト」「なのは」にカートリッジの使い方を教えほしい」

アル 「「フェイト」なのはを、呼んでくれ。

なのはがきたら、リミッターを外すから。

俺を呼んでくれ。

烈火の将、頼んだ」

アル 「風の癒し手は、はやてちゃんのお世話で」

アルは、夜天の書の前に立った。

アル 「>合言キーを唱えく 「王の命より 夜天の書よ、管制人格よ出てこい」「

夜天の書が光だし、魔法陣が現れ。
管制人格が出てきた。

管制人格 「また・・・全てが終わってしまった。
いったい、幾度こんな悲しみを繰り返すのか。」

ミナト 「久しぶりだね、我が妹よ。

まだ、封印解除にもなっていないぞ。

王様より、強制的に話せるようにしただけだ。」

管制人格 「御姉様？」

はやて 「似てる」

アリシア 「そっくり」

フェイト 「似てる」

プレシア 「本当に、似てるわね」

ヴォルケンリッター 「髪と目、意外瓜二つだな」

アルフ 「また、そっくりが増えたなあ」

ミナト 「私との話しあとだ。

王様が、幾つ聞きたいことがある。」

管制人格 「御姉様がいて、御姉様が「王様」てことは？」

ミナト 「そうだ」

管制人格は、いきなり膝まつきをした。

管制人格 「王の帰還を心より、申し上げます」

管制人格 「何なりと、お聞きいたします。」

アル 「まあ、普通に座ってくれるか」

管制人格 「わかりました」

アル 「「はやてちゃん」名前考えた？」

はやて 「考えたよ」

アル 「名前、付けてあげなよ。話しはあとでもいいし。」

はやて 「夜天の主の名において汝に新たな名を贈る。

強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

リインフォース 「ありがとうございます、我が主」

アル 「よかったな」

リインフォース 「ありがとうございます、王様」

アル 「リインフォース。まず、はやてちゃん病気の進行は、どこまでいつてる？」

リインフォース 「長くても、半年以内の命ですね」

アル 「リインフォースの制御は、どこまでだ？」

リインフォース 「制御は、無理です。

プログラムも破壊されています。

元のプログラムも、わかりません。

破壊をしてくれませんか？」

アル 「リインフォースよ、ミナトの本を忘れてないかい？」

リインフォース 「あの時、夜天の書に使って消えたはず？」

ミナト 「確かに、消えたよ。プログラムの基本的は同じでないか？」

リインフォース 「御姉様とのリンクしたら。
暴走プログラムが、起動してしまい。
御姉様まで蒐集してしまいます」

アル 「はやてちゃんとリインフォースは、
僕とミナトが全力で治療するし、他の皆も協力してくれてるから。
はやてちゃんとリインフォースは、勝手なことするなよ。
最低でも、準備が1週間はかかる」

アル 「リインフォースよ、あとでミナトにメンテ」診断」しとけ
よ。

治療の計画がで কিনからな」

はやて 「リインフォースは、アルくんのこと王様で、呼ぶの？」

ヴォルケンリッター 「なんでそんなやつを」

リインフォース 「御姉様の「源の書」は、
初代アルハザードの王が作りだしものだ。

御姉様の起動条件は、王の魂なのだ」

リインフォース 「ヴォルケンリッターよ、王様に無礼がないよう
にな？」

ミナトはリインフォースのメンテに、
プレシアさんは例の研究に、
はやては、台所で後片付けをしに

アリシア・フェイト・シグナム・アル・なのはは、いつの間にかき
ていた。

架設空間にいる

アル 「3人とも、デバイスを出してくれ」

3人とも出した。

アル 「>合言キー 唱えく「王の命より プログラム リミッター
解除」」

レイジングハート「all right」

バルディッシュ「yes, sir」

アルディッシュ「yes, sir」

アル 「デバイスを起動させて」

アル 「レイジングハートとバルディッシュは新しいシステムを組み込んだんだよ」

アル 「そのコーチに、烈火の将に頼んだから、説明受けてくれ。レイジングハートとバルディッシュは新しい名前で呼んでくれ」

アームドデバイスの準備？

アリシア 「なんで、アルディッシュにはないの？」

アル 「アルディッシュは、最初から組み込んでいただけたよ。

アリシアには、訓練用としての機能しか起動させてなかったただだよ」

なのは&フエイト&アリシア 「セットアップ」

レイジングハート 「Order of the setup was accepted」.

バルディッシュ 「Operating check of the new system has started」.

レイジングハート 「Exchange parts are in good condition, completely cleared from the NEURO-DYNA-IDENT alpha zero one to beta eight six five」.

レイジングハート 「Exchange parts of an agreement mission has completely cleared from the NEURO-DYNA-IDENT out zero one to eta eight six five」.

バルディッシュ 「The deformation mechanism

nism confirmation is in good condition.
r.

レイジングハート 「Main system, start up
p
r.

バルディッシュ 「Haken form deformation preparation: the battle with the maximum performance is all ways possible.
r.

バルディッシュ 「Haken form information and collaboration: that will be the replaced form of the Scythian Form.
r.

レイジングハート 「An accel and a buste r: the modes switching became possible. The percentage of synchronicity, are maintained.
r.

レイジングハート 「An accel and a buste r: the modes scheduling became possible. The same sequence is eated, imagined, and intended.
r.

バルディッシュ 「Condition, all green.
Get set.
r.

レイジングハート 「Standby, ready」.

バルディッシュ&レイジングハート 「Driving
nitron」.

なのは 「レイジングハート・エクセリオン」
フェイト 「バルディッシュ・アサルト」

バルディッシュ 「Assault form, cartridge
set」.

レイジングハート 「Accelerate mode, standby,
ready」.

アルディッシュ 「Assault form, cartridge
set」.

アル 「烈火の将、あとは頼んだ」

シグナム 「ああ」

シグナムは、カートリッジ システムの説明し、危険性を話した。

シグナム 「カートリッジの、玉はシャマルの方が詳しいからあとで聞いてくれ」

アルは、プレシアの所に行き。研究のデータを見ていた。

ミナトが、リインフォースのメンテが終わり。
その、データをアルに見せに行った。

ミナト 「王様、メンテのデータです」

アル 「ありがとう、あとで見るよ」

ミナト 「む」

ミナト 「2人とも、また倒れたいのですか？
いまから、治療しますから。そこに並んで」

アルとプレシアは、こないだ倒れたばかりなので、素直に言うことに従った。

ミナトは治療魔法を掛けた。

ミナト 「こんなものでしょう。あなた達2人が、この治療の柱なんですから、そんなになる前に声かけて、くださいね」

プレシア & a m p ; アル 「はい」

次の日

アルに通信がきた

アル 「アルです」

マリ 「マリです。ご指定の部分全部、揃えました。アースラのメンテルームに、置いてあります。作業許可もありますので。いつでもきてください。」

アル 「早いね？」

マリ 「お金の力は、強いね。」

アル 「あはは、あとで行きますよ」

マリー 「お待ちしてます」

アルは念話でミナトに伝え、アースラに向かった。

源の書に新たな力？

アルとミナトは、アースラに着くと。
リンディさんに、挨拶しに行き。
メンテルームに向かった。

アル 「マリーさん、どうも」

マリー 「助手をしてもいいですか？」

アル 「お願いします。ミナト準備を頼む」

ミナト 「王様、わかりました」

アルとマリーは準備ができるまで、違う作業をした。

アル 「マリーさん、このデータのここなんですが、マリーさんの意見を聞きたいかなと？」

マリー 「このデータは、凄すぎです。
強度意外での、意見はできそうにないです。」

アル 「完成したら、サンプルとしてこの、データはあげますよ」

マリー 「全力で、お手伝いさせていただきます。」

ミナト 「準備できました。王様」

こうして、8時間後ミナトが最終チェックしたら。

ミナト 「この、部品は交換で、この表の部品が必要です。」

マリー 「交換する部品は、本局にありますから取ってきますね。
表の部品は、そのこの棚のどこにありますよ。」

マリーは、本局に取りに行った。

アルは、棚を漁り。
部品を見つけ、作業してた。

マリー 「お待たせしました」

交換部品を入れ替え、ミナトが最終チェックした。

ミナト 「部品最終チェック完了、異常ありません。
次にシステムチェックします。」

ミナト 「システムチェック完了。異常ありません。
次にプログラムチェックします。」

ミナト 「プログラムチェック完了。異常ありません。」

ミナト 「あとは、動作確認だけです」

アル 「マリーさん、おかげさまで、計画に支障がなくなりました。
ありがとうございます。データをどうぞ。」

アルとミナトは家帰った。

アルとミナトは家に帰ると、そのまま架設空間に行った。

アル&ミナト「ユニゾン イン」

ミナト「武器と騎士甲冑を」

アル「武器は前と同じ形で、甲冑はリストバンドとブースとマントだけ」

ミナト「マントは、どのようなやつを？」

アル「比古 清十郎が着てたやつで」

ミナト「設定完了です。起動します。」

アル&ミナト「成功だ」

アル「ユニゾン解いて」

アル&ミナト「ユニゾン アウト」

アル 「モード リリース」

アルのアームドデバイスを待機状態にした。
シルバーネックレスで、刀形である。

アル 「お前の名は、ヴェルティンだ」

アルは皆のどこに行き。

アル 「はやて、ヴォルケンリッターの騎士甲冑はできたか？」

はやて 「できてるで」

アル 「なのは・アリシア・フェイト・烈火の将、デバイスの動作
チェックしたいから、手伝ってくれ。

最初なのは・アリシア・フェイトで、どこからでもいいから、全力
全開で魔法してくれ。スターライトブレイカーや

フォトンランサー・フランクスシフトも、撃ってくれ。カートリ
ッジも、使ってくれ。

自分は、防御しかない。

そのあと、烈火の将と武器の耐久性だ。」

なのは・フェイト・アリシア 「危険だよ」

アル 「ミナトが、いるからなんとかなる」

ミナト 「死なないから、殺す気で攻撃してね。
で、ないと正確なデータが、録れないからね」

アル達は架設空間に行き。

なのは 「レイジングハート、セットアップ」
アリシア 「アルディッシュ、セットアップ」
フェイト 「バルディッシュ、セットアップ」
アル 「ヴェルティン、セットアップ」

アルは、架設空間の真ん中に待機し、それに対して3方向にばらけた。

アルは「パンツァーガイスト」は常に維持できるように、心がけようとした。「パンツァーシルト」は重ねがけをしようと、実戦でやるうとしている。

3人共にカートリッジを使い。

アリシア 「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち砕け、ファイアー。」

フェイト 「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち砕け、ファイアー。」

なのは 「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。貫け！閃光！ スターライト・ブレイカー！」

アル 「いきなり、ですか？
ミナト、死ねるかもよ？」

アルは、アリシア・フェイトの攻撃を両手で「パンツァーシルト」でなのはの攻撃を身体で「パンツァーガイスト」で。

アルのパンツァーシルトが「パツリーン」と壊れそのままの威力で「ドーン」とまともに当たった。

キャラ設定・デバイス

アル・ロング

身長 135cm 体重 35kg 歳 5歳 髪 赤 長さ腰迄

ある

飛天御剣流 継承者

魔法陣 ベルカ

魔力 EX

魔法ランク なし

魔法変化 風・雷

希少スキル 写輪眼・源の書

デバイス アームドデバイス・ユニゾンデバイス

デバイス名 ヴェルティン・ミナト

天御剣流 写輪眼 影分身 架設空間 武空術 瞬間移動 結界魔

法「AMF付き」治療魔法

ヴェルティン

武器 刀

装備 騎士甲冑

システム カートリッジ

ミナト

見た目はリンフォースと同じ 目と髪が違う>>目が輪廻眼である
髪 が赤く<

あとは原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 SSS

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル 輪廻眼

ユニゾンデバイス

治療魔法 検索 魔法コピー

アリシア・テストロッサ

原作と同じで「フェイトの9歳の姿」

間違いないようにフェイトと違う服を着てる

魔法陣 ミッド

魔力 A A A

魔法ランク なし

魔法変化 雷

希少スキル ソニックブーム

デバイス インテリジェントデバイス

デバイス名 アルディッシュ

アルディッシュ

武器 杖

装備 バリヤジャケット

システム ベルカ式カートリッジ

フェイト・テストロッサ

原作と同じ

魔法陣 ミッド

魔力 A A A

魔法ランク なし

魔法変化 雷

希少スキル ソニックブーム

デバイス インテリジェントデバイス

デバイス名 バルディッシュ・アサルト

バルディッシュ・アサルト

武器 杖

装備 バリヤジャケット

システム ベルカ式カートリッジ

高町なのは

原作と同じ

魔法陣 ミッド

魔力 A A A

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル なし

デバイス インテリジェントデバイス

デバイス名 レイジングハート・エクセリオン

砲撃魔法

レイジングハート・エクセリオン

武器 杖

装備 バリヤジャケット

システム ベルカ式カートリッジ

シグナム「烈火の将」

原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 A A

魔法ランク なし

魔法変化 火

希少スキル なし

デバイス アームドデバイス

デバイス名 レヴァンティン

レヴァンティン

武器 剣

装備 騎士甲冑

システム カートリッジ

シャマル「風の癒し手」

原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 A

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル 旅の鏡

デバイス アームドデバイス

デバイス名 クラールヴント

クラールヴント

武器 指輪

装備 騎士甲冑

システム なし

ヴィータ「紅の鉄騎」

原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 A A

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル なし

デバイス アームドデバイス

デバイス名 グラーフアイゼン

グラーフアイゼン

武器 ハンマー

装備 騎士甲冑

システム カートリッジ

ザフィーラ「蒼き狼」

原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 A A

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル なし

デバイス ?

デバイス名 ?

武器 ?

装備 騎士甲冑

システム なし

リインフォース
原作と同じ
魔法陣 ベルカ
魔力 SS
魔法ランク なし
魔法変化 なし
希少スキル なし
ユニゾンデバイス
広域拡散型

黒い影が動き出す？

アルは「パンツァーガイスト」だけで耐えた。

煙幕が無くなり

アルは、倒れていた。

ミナト 「3人共が撃ち終わったら、そのあと気絶したんだな」

ミナトがアルの側に行き治療魔法掛けた。

ミナト 「データ的に、おかしくないのに「パンツァーシルト」は、壊れたんだ？」

シグナム 「術式かもな？何かおかしかったぞ」

ミナト 「王様が、目を覚ますまで休憩です」

ミナト 「3人共に、急成長しているね」

シグナム 「ああ」

ミナト 「それにしても、
騎士甲冑は無傷でどうなれば気絶するだ？」

シグナム 「疲労でわないのか？
いまだに、「パンツァーガイスト」は、したままだ」

アル 「あ あ 綺麗なお花畑、見つけた」

シグナム&ミナト 「!？」

アリシア&フェイト&なのは 「そっちはだめ」

アルは寝惚けている

アリシア・フェイト・なのは、アルの所に行き。
起こしに、かかった。

アル 「この花、いい臭いがするよ。」「お母さん」て・・・
アル 「あれ！？皆どうしたの？」

ミナト 「王様は、気絶したんだな。

王様は、お母様には夢でしか、お逢いにできないのに、お三方は邪魔しますか」

アリシア・フェイト・なのは 「どうして？」

ミナト 「王様には、私が、治療魔法掛けました。
気がつくまで、寝させていたのですよ。」

あと、王様のご両親はもう夢でしかお逢いにできないのに。」

シグナム 「夢でしかって？」

アル 「お母さんは、僕を生んで2ヶ月で、お父さんは、3歳の時にテロに巻き込まれてね」

ミナト 「それより、なんで「パンツァーシルト」が耐えきれなかったんですか？」

アル 「重ねがけようとしたら、壊れた」

シグナム 「やはりな、術式がおかしかったぞ」

アル 「間違いたのか、烈火の将教えくれ」

アルは「写輪眼」発動させ

アル 「烈火の将、一回だけやってくれ」

シグナムは「パンツァーシルト」やってくれた。

アル 「ありがとう。次は、防ぐよ」

さっきと同じで

なのは 「スターライトブレイカー」

フェイト 「フォトンランサー・ファランクスシフト」

アリシア 「フォトンランサー・ファランクスシフト」

アルも、さっきと同じで攻撃を防いだ。

アル 「さっきより、平気だ？」

3人共、手加減してないでしょうね？」

ミナト 「ああ、成る程、王様は、魔力の波があるみたいです。」

ミナト 「とくに、疲労した時に」

アリシア・フェイト・なのはは、魔力切れまで撃ち続けて、気絶した。

アル 「3人に、治療魔法を」

ミナト 「了解、王様」

3人共、部屋の外に寝かせた。

アル 「烈火の将、まだ武器の設定は、終わってないのよ。データとりながら、やるから途中で、止めることがあるよ。」

シグナム 「わかった」

アルとシグナムは、アリシア・なのは・フェイトが、起きるまでやり続けた。

アルの武器「刀」が、軽る為リストバンドで重量調整ができる。柄も太さの調整ができる。刃には、AMFがある「Aランクまでの攻

撃を消せる」>試作中でテストしている。まだ実用にはなっていない<

アルとシグナムは、ミナトに治療魔法を掛けてもらい。
仮眠をとった。

アルとミナトが起きる

ミナト 「今日から、薬草取りに行きますね。王様」

アル 「計画は、第3段階に入る、襲ってきた動物なら、死なない程度に、吸収してもいいよ。完成だけはするなよ。」

アル 「早く帰ってきてね」

ミナト 「はい、王様」

プレシア 「アルくん、研究結果よ。治療器具も完成。」

アル 「結果は、…成る程、薬草が必要になるわけか？」

プレシア 「模型のおかげで、はやくできた>治療器具くわね」

アル「さつき、ミナトが薬草を取りに行ったから。戻るまで休んでいてください。」

アルは通信端末を見ていた。それも、三提督からの、定期報告書を。

アル「裏の何かが、探しものね。」

この事をミナトに念話で伝えた。

アルはリンディに通信しだした。

リンディ「リンディです」

アル「アルです。第3段階に、入りました。

あと、この報告書を、もう少し詳しく知りたいです。もしや、この計画の邪魔するかもなので。

行動も気おつけて下さい。」

リンディ「わかりました。それでわ」

薬草集め始める

アル 「管理局の鼠の尻尾でも見つけたいね。
プレシアさん？」

プレシア 「この報告書は、本当に？」

アル 「ああ、何か心当たりがあるの？」

プレシア 「一部、ヤン提督が絡んでいるわよ。」

アル 「昔？」

プレシア 「今でもよ」

アル 「ヤンは、こないだ自分が殺したよ。まだ、正式には発表してないからね。」

プレシア 「新たな影を、捕らえたっこと？」

アル 「かもね。ちょっと、出かけてきます。」

アルは、グレアムの所に向かった。

アルは、面会手続きをし、中にはいった。

今、グレアムはリゼ姉妹の介護している。

アル 「お久しぶりです」

グレアム 「久しぶりだな。今日は何かな？」

アル 「今日は、管理局の方できました。
まず、このデータを見て下さい。
それで、知ってることを、お聞かせ下さい。
貴方は、何らかの形で仕事をしているはずですよ。」

グレアムは、データを見ていた。

グレアム 「ああ。確かに、幾つかしているな。
これが、なんなのかね？」

アル 「夜天の書」「闇の書」を使い、戦争でも起こそうとしている。組織が、関わってるデータです。管理局の権力者が、糸を引いているのですよ。」

グレアム 「まさか」

アル 「夜天の書」「闇の書」を、封印又は改善の邪魔をしようとしている。可能性あります。」

グレアム 「もし、私が封印しても。意味ないことじゃないか」

アル 「結果的にはね。もし、貴方が封印したと、しましょう。それで次元空間に捨てたと、しましょう。貴方の戦艦に鼠が紛れ込んでいますよ。」

そこまで、言えわかりますよね？」

グレアム 「ああ、私は関係ないのに、全責任がくるようになってる。」

アル 「鼠を見つけないと、本当の平和はこないんですよ。
貴方の知ってることを、お聞かせ下さい。
このままだと、貴方が犯人されますよ。」

グレアム 「わかった。過去の仕事を、調べたい。話しは、それからだ。」

あえて、監視してくれ。」

アル 「情報を提供してくれるなら、監視はしない。」

グレアム 「私は、あの子」はやて」の為に協力する。
だから、監視をしてくれないか。」

アル 「わかった。僕が監視します。
時間的に、どのくらいかかる？」

グレアム 「遅くても、二時間ぐらいだ。」

アル 「わかった。」

アルは、監視と言うことはしてなかった。

アルは、管理局の権力者リストを見ていた。

アル 「ヤン提督の仕事振りの評価は、どうでした？」

グレアム 「あまり、よくないね。」

アル 「そうですか」

アル 「あと、ヤン提督を利用していた人物はいませんか？」

グレアム 「いた、だろうけど。私は知らんな。」

アル 「そうですか」

グレアム 「データを揃えたよ。いま、そっちに送るよ。」

アル 「わかりました」

アルは、データを見ていた。

アル 「この、報告書も幾つか嘘の報告書を出しているね？」

グレアム 「そうだ」

アル 「誰かの命令で？」

グレアム 「ああ、確かにほとんどそんなとこだ。あとは、司法取引による物だ」

アル 「いや、なんぼ司法取引したとしても、報告書に嘘は、いかによ。

何かあれば、全責任を取らされるよ」

グレアム 「・・・」

アル 「ここまで、腐っていたとは。

そんなに地位や権力で関係ない人を巻き込んで、戦争しようとして自分は安全所で高見の見物か。

一人で国と、戦争も出来ない者が、地位や権力持つと関係のない人が泣くようになるんですよ」

アル 「貴方に命令していた人物は、誰なんですか？」

グレアム 「わからん。ただ、中將から上の者だと、しかね。」

アル 「この、データを調べさせてもらいます」

グレアム 「ああ、役に立てなくて済まないね」

アル 「いえ。自分の検討者リストからだいぶん絞れましたから。リゼ姉妹の仕事データも、あとでいいので送って下さい。」

グレアム 「わかった」

アルは、家に帰り。三提督の仕事データを調べていた。

アル 「聖王教会からの、仕事が多いなあ。」

ミナト 「ただいま、王様」

アル 「お帰り」

ミナト 「紅茶でいい？」

アル 「うん。ありがとう」

ミナトはプレシアの所に薬草とコーヒーを持っていった。
そのあと、アルに紅茶を持っていった。

アルは、リンディに連絡をした。

リンディ 「リンディです」

アル 「アルです。聖王教会の資料が欲しいので、送って下さい」

リンディ 「わかったわ」

アル 「管理局の影共が偵察に動きだしたようです。
下手したら戦争になるかもですよ。」

リンディ 「わかったわ、アースラーには連絡します。」

戦いの始まり？

アル 「ミナト」今日は、管理外世界に行くのか？」

ミナト 「はい、王様」

アル 「今日は、僕と烈火の将が、護衛で行こう。
その世界での、入国手続きを調べたけど、ないのよ。
入国して、誰かに聞いてから行動しようね」

アル達は、管理外世界に入国してから、人を探し入国手続きを聞いてから、
その組織と話し手続きした。
入国の理由を話した。

組織代表 「なんて、可哀想な子なんでしょう。
それ以外の薬もあげますよ。あと、他の何者かが入国した話を聞いてますから」

アル 「それ者の様子は？」

組織代表 「監視・偵察だけなら、放置ですよ。」

何かあれば、抹殺です」

アル 「成る程、こちらの客人なら、自分達が替わり抹殺しますよ。それあと、報告します。それでいい？」

組織代表 「それでいいです。」

アル 「その際、地形及び建物等、壊れるかもです。最小限、気をつけますが、そこだけ覚えていて下さい。あと戦いが起きたら避難してください。」

組織代表 「わかりました。近くまで車で送りますよ。」

アル 「自分達は、空から行きますよ。その時でも跡を着けている者がいたら、避難させてくだされば、人だけは助かります。」

組織代表 「わかりました。ここまで親切な、入国者は初めてですよ」

アル達は、空から移動した。

アル 「やっぱり、自分達が狙いらしいな」

ミナト 「ですね」

シグナム 「かなり強いな」

アル 「ミナトは、薬草を確保してくれ。シグナムは、ミナトの護衛頼んだ。
敵は自分がおさえるから。」

ミナト 「わかりました。王様」

シグナム 「わかった。」

アルは、薬草付近でミナトに結界を張らせ、薬草から500m以内の所にアルの結界「AMF付きで」を張った。

アルの前に、偵察部隊20人いた。

??? 「時空管理局だ、闇の書所持により抹殺します。」

アル 「なに、それ？」

??? 「その、赤い女のことだよ」

アル 「ミナトか。ミナトは「源の書」だ、治療専門書とも言つ。
闇の書とか言つ者でないよ」

??? 「自分は、前回の闇の書事件で見ていた者だ、
だから間違つわけがない。抹殺開始だ」

アル 「問答無用か、>合言キーを唱えく」「王の命より モードリ
リース」 ヴェルティン」

偵察部隊のデバイスが待機になり、焦りだした。

アルは、本気で剣気を放ち。アルは、信剣を使い
焦りと幻覚で、パニックなり

アルは、かなり手加減し

アル 「土龍閃」

土や石を、偵察部隊にぶつけ

アル 「九頭龍閃」

偵察部隊20人を、1分で倒した。

アル 「弱すぎ」

シグナム 「殺したのか？」

アル 「まだだ」

アル 「こいつら、吸収していいぞ。」

シグナムは、吸収しだした。

アル 「全員終われば、抹殺だ」

アル 「先に、空を片付けてくる」

ミナト 「いつてらしゃい」

アルは、瞬間移動で行き。たった2分で全滅させた。
アルは、アースラーに通信した。

アル 「戦艦を拾いにきてください」

エイミー 「わかりました」

アルは、戦艦の人間を紐で結び、瞬間移動で戻り、吸収できる者は残りと吸収終わった者から抹殺を始めた。

アル 「こいつら、本当に管理局か？弱すぎ」

シグナム 「あれが本気か？」

ミナト 「まさか、半分でていれば、いい方ですよ。

魔力は、1 / 3ぐらいでしたよ」

シグナム 「あれで!？」

アル 「「ミナト」こいつらの、デバイスを回収しとけよ。」

アル達は、抹殺した奴らを引き渡した。

組織代表 「こいつら、何者だったんですか？」

アル 「時空管理局で、知っていますか？」

組織代表 「名前ぐらいは知っています」

アル 「その、人間です」

色々お話し後始末も頼まれた。

アルは、エイミーーに通信し、後始末も頼んだ。

薬の完成

アル達は、家に帰り。

薬草を、プレシアに。

薬を、ミナトが研究を始めた。

アルは、偵察部隊から押収したデバイスを調べ始めた。

シグナムが、紅茶を持ってきた。

シグナム 「お茶だ。」

アル 「ありがとう」

シグナム 「他に、手伝いしたいのだが」

アル 「烈火の将よ、なら主の側にいてやれ」

アル 「あと、この薬を飲ませといてね」

シグナム 「わかった」

シグナムは、薬を持って渋々はやての所に向かった。

アルは、シグナムの気持ちはわかっていたから冷たく接したのだ。

アル 「このデバイスは、記録映像を改変しているようだ」
アル 「最初から捕まったときの対処な訳ね」

アルは、リンディに連絡しようと思ったたら通信が来た。

アル 「アルです」

リンディ 「リンディです」

アル 「今、連絡しようと思った所でしたから助かります」

リンディ 「まず、艦は例の場所に置いて来ました。容疑者達は三提督に引き渡しました。」

アル 「ご苦労様です。容疑者達のデバイスからは証拠を無くさ

れました。」

リンディ 「あの、艦は何に使うのですか？」

アル 「あの家を、壊させない為かな」

アル 「彼女達の思い出の場所だからね」

リンディ 「なるほど」

リンディ 「それは、賛成します。」

アル 「薬草も揃ったと思うし、後は準備が終わり次第、最終段階に入るよ」

リンディ 「了解しました。影の動きがあれば連絡します。」

アル 「お願いします。」

アルは、プレシアの所に向かった。

途中でミナトに声を掛けられた。

ミナト 「王様、薬のデータです。どちらに？」

アル 「プレシアさんの所だよ」

ミナト 「何か持つて行きますね。あなた方は、研究になると食べることを忘れるからね」

アル 「すまない」

アルは、プレシアの所に着き、研究をしながらミナトのデータを見ていた。そのデータの一部にチェックをしていき、プレシアのデータと照らし合わせた。

アル 「プレシアさん」

プレシア 「はい？」

アル 「このデータを見てください。」

プレシアは、照らし合わせたデータを見ていた。

プレシア 「凄いわ」

ミナトが、簡単な食事を持って来たから、食べながら薬作りの打ち合わせを作業を話し出した。

アルは、シャマルも呼んで薬作りをした。

朝方に薬作りは完成し、その後4人はお約束なのか倒れた。

治療の準備

ユーノ 「アルに連絡がつかない」

ユーノ は、なのはに連絡した。

なのは 「なのはです」

ユーノ 「やあ」

ユーノ 「久しぶりだね、元気だった？」

なのは 「うん。久しぶりだね。どうしたの？」

ユーノ 「アルに連絡がつかないから、なのはなら何か知らないかなと思って」

なのは 「アル君なら研究室にいるはずだけど？」

なのは 「もしかして」

なのは は、研究室に向かった。

ユーノ 「なのは… なのは…」

なのは は、ユーノのことを忘れていたのだ。

なのは が、研究室に着き部屋を見て4人が倒れていたのだ。なのは

は、アルに声を掛けたらプレシアが目を覚ました。

プレシア 「なのはちゃん、何の用事かしら？」

プレシアは、寝惚けていた。

なのは 「あなた方は、倒れてましたよね？」

プレシア 「へ？」

プレシアは、辺りを見ていた。

プレシア 「そう見たいね…。」

ミナトが、起きた。

ミナト 「私迄、倒れるなんて。」

ミナトは、回復魔法を掛けようとしたら。

ミナト 「既に、回復魔法を掛けられていた。」

アルが、倒れる前に回復魔法を掛けたからだ。

アル 「もう少し寝させてくれ。」

なのは 「ごめんなさい」

ミナト 「なのはちゃん、何かご用？」

なのは 「は、なの？」

なのは 「ユーノ君から通信が来て、アル君に連絡がつかないから私の所に来たの」

ミナト 「で、内容は？」

なのは 「聞いてなかったなの」

ミナト 「なのはちゃん通信繋がたまま見ただけど」

なのは 「ユーノ君？」

ユーノ 「なのは… やつと気づいてくれてありがとうございます。ミナトさん、資料検索結果です。後、参考資料になります。後、何かあれば連絡下さい」

ミナト 「確かに、後このデータの分析して欲しいそうです。」

ユーノ 「わかりました。これなら、今日中に終わりますよ」
ユーノ 「それでは、なのは…またね」

なのは 「うん…またね」

シグナムが来て

シグナム 「朝ごはんだ」

いきなり、声がした為。アルとシャル以外が驚いた。

シグナム 「シャル、こんな所で寝よつて。主に心配させるな。」

シャルは、シグナムに思い切り踏まれて起きた。

シャル 「痛」

シグナム 「起きたか？」

シャル 「起こすなら、もう少し優しく起こして欲しいわよ。」

シグナム 「優しく起こしたつもりだが」

シグナム 「後は、アルだけか」

ミナト 「王様は、まだ起こすな」

シグナム 「何故だ？」

ミナト 「命令されたからだ」

シグナム 「仕方ないな」

アルとミナト以外は、朝ごはんを食べに行った。

ミナト 「王様、起きて下さい。ユーノ君からのデータです。これならはやてちゃんの治療に参考になりますよ。」

アル 「わかったよ。起きるよ。」

アルは、起き上がり資料に目を通した。

リンディから通信が来た。

アル 「アルです。」

リンディ 「リンディです。 又、影が動きだしましたわ。」

アル 「わかった。例の所に誘導して欲しいけどいい？」

リンディ 「三提督が、いらしゃいますからなんとかします。」

アル 「お願いします。」

アル 「ミナト、聞いたな。影を成敗したら、治療に入るよ。」

ミナト 「了解です。」

アルとミナトはロビーに向かった。

アルは、ユーノに連絡し治療の流れを説明して、アースラーに待機するように頼んだ。

アルは、全員がロビーに揃ったのを確認して今からの、戦いと治療の説明した。

治療の邪魔者退治

アル 「影との戦いは、シグナムと僕が、離れた場所から僕達が倒した奴らをシャマルが収集」

アル 「ミナトは、夜天の書とはやてちゃんの進行制御」

アル 「プレシアさんは、治療の準備を」

アル 「残りは、3人の守りだ」

プレシア 「わかったわ」

ミナト 「了解」

はやて 「お願いや」

フェイト 「はい」

アリシア 「はい」

シャマル 「はい」

シグナム 「了解した」

ザフィーラ 「心得た」

ヴィータ 「おう」

なのは 「わかったなの」

アルフ 「わかったけど、どこで闘いや治療するだ？」

アル 「時の庭園だよ」

プレシア 「私とアリシアの病気の治療費にアル君に渡したのよ。
フェイト・アルフ黙っててごめんなさいねえ」

フェイト・アルフ 「でも」

プレシア 「でもね」

プレシア 「はやてちゃんの治療には、地球の替わりの場所が必要なのよ。

今の幸せを守る為にもね。」

アル 「なるべく、被害が出ないようにしますよ」

プレシア 「私達家族は、ここ以外では幸せに暮らせないから。今の幸せを守る為にも「時の庭園」を使って欲しいのよ。」

プレシア 「無くなっても構わないわよ。今の幸せを守る為だもの。」

ミナト 「王様、そろそろ行かないと」

アル 「ああ」

アル 「シグナム、なるべく船は壊さないように闘ってくれ。」

シグナム 「わかった」

アル 「僕とシグナムは、僕の移動で
後は、リンディさんをお願いしていますので」

リンディから通信が来た。

アル 「お願いします。」

リンディ 「わかりました。」「転送開始」

アル 「シグナム、僕に捕まってくれ。」

シグナム 「ああ」

シグナムは、アルを抱き締めた。

アル 「いきなり、何する」

アルは、あわてて離れた。

シグナム 「捕まれって言っから。」

アル 「表現の仕方を間違えたのか。」

シグナムは、よく分かってなかったのだ。

アル 「服とかに、捕まってくれ」

シグナム 「わかった」

アルは、瞬間移動で移動した。影の船の中に。
着いた瞬間にデイバイスを出した。

アル 「ヴェルティン」

シグナム 「レヴァンティン」

アル・シグナム 「「セット アップ」」

アル 「まず、船の制圧する。残りはヴィータがしてくれるよ。」

シグナム 「なるほどな、ヴィータの性格をつまく使ったな」

アル 「ここは、早く片付けてはやてちゃんの治療するよ」

シグナム 「ああ、主の為だな」

船の制圧するのに3分も、かかった。アルは、船にいた者を全員集めバインドをした。

シグナムは、その者達からリンカーコアを取り出した。シグナムは念話で

シグナム 「シャマル、準備が出来た。収集してくれ。」

シャマル 「わかったわ。シグナム」

シャマルは「旅の鏡」を使い、リンカーコアの場所を探し、収集しだした。

アルは、リンディに通信しだした。

アル 「この船、制圧完了した。後、お願いします。」

リンディ 「わかりました。こちらは、準備万端です。」

アル 「了解。」

アル 「シグナム」

シグナム 「なんだ？」

アル 「捕まれ。みんなの所に向かうぞ。」

シグナム 「ああ、わかった」

シグナムは、アルの服に捕まった。

時の庭園では

ヴィータとザフィーラが影を倒してた。流れ飛んでくる砲撃をなのは・フェイト・アリシアが防いだり撃ち落としてた。

シャルは、船の収集が終わり。ヴィータとザフィーラの倒した奴らを収集しだした。

アルとシグナムが時の庭園に現れたら残りの奴らを倒した。

アル 「シャルが、収集が終われば奴らを片付けてはやてちゃんの治療を始めるよ」

皆 「了解」
アースラー組 「了解」

プレシア 「はやてちゃんの治療の準備が終わったわよ」

ミナト 「風の癒し手よ、後何ページだ？」

シャル 「後、40ページです。」

アルは今からの計画を説明しだした。

決戦と治療（前編）

アルとシグナムが、時の庭園に来る少し前。

はやて 「この人達は？」

アルフ 「夜天の書を悪用に使用と考えている奴らだ。
だから、奴らは殺す気で私達に攻撃してきてる。」

ヴィータ・ザフィーラは、半殺しに近い状態なるまで攻撃していた。
それを見たはやては。

はやて 「ヴィータ、ザフィーラそこまでやる必要ないや……」

「はやてが、言いかけた瞬間にシャマルが旅の鏡を使い、ヴィータの死角から攻撃しようとしていた奴を攻撃した。
奴の体からシャマルの手が生えた。」

握っていた手の開きリンカーコアを取り出し収集しだした。

はやて 「シャル、何してるん？」

アルフ 「夜天の書の収集」

ヴィータ 「シャル、わりいゝ助かった。」

シャル 「油断しないでね、ヴィータちゃんに何か、あればはやてちゃんが悲しむからね」

ヴィータ 「だなあ。」

シャルは、ヴィータとザフィーラの倒した者達から収集しだした。

はやて側

はやて 「収集しなくても、アル君が私の病気を直してくれるんだから」

ミナト 「はやてちゃんの治療には、夜天の書を完成する必要があるのよ。

守護騎士達の治療も兼ねてるからね。」

ミナト 「王様が、闘いの相手って言ったのは彼奴ら（そいつら）ではない。

夜天の書の闇の事だ。」

ミナト 「それには、「夜天の書」の中にある闇の部分の切り離しが必要だからだ」

ミナト 「完成したら、我が妹が説明してくれる。
本当の夜天の主になる為に。」

はやて 「わかった」

シャマル側

シグナムから念話きた。

シグナム 「シャマル、準備が出来た。収集してくれ。」

シャマル 「わかったわ。シグナム」

シャマルは「旅の鏡」をシグナムがいる船に目標をし、リンカーコアの場所を探し、収集しだした。

シャマル 「リンカーコア、収集」

シャマルは、収集しながら周辺を警戒していた。

シャマル 「よし。船の方は、収集が終わりね。」

シャマルは、ヴィータの動きを見て違和感を感じて、周りを見たら。

シャマル 「アル君とシグナムだわ。」

話は戻り

アルは、通信を開いた。

アル 「シャマルが、収集が終われば奴らを片付けてから、はや

てちゃんの治療を始めるよ。」

皆 「了解」

アースラー組 「了解です。」

プレシア 「はやてちゃんの治療の準備が終わったわよ。」

アル 「ありがとう。プレシアさん。」

ミナト 「風の癒し手よ、残りは何ページだ？」

シャル 「残りは、40ページです。」

アルは今からの計画を説明しだした。

アル 「もう少し、ページを減らしたいから。」
アル 「リンディさん、餌を転送してください。」

リンディ 「わかったわ。」

アースラー側

リンディは、目に涙を溜めながら言った。

リンディ 「クロロ、ごめんなさいねえ。
貴方だけ行かせることになって。」

クロロ 「そんなことより」
クロロ 「この事件では、自分には・・・これしか役に立てないからしょうがないのです。」

クロロ 「母・・・艦長行ってきます。」

リンディ 「行つてらしゃい。」

リンディは、手を振りながら見送りした。
そして、クロロの足元に魔法陣が現れ、クロロは、時の庭園に転送された。

時の庭園側

アル達の近くに、魔法陣が現れた。

決戦と治療（中編）

アル達の近くに、魔法陣が現れた。

アル 「餌が、来たようだな。」

クロロが、現れた。

はやて 「どちらさん？」

なのは 「クロロ君。」

アルフ 「邪魔者か」

フェイト 「KY君。」

アリシア 「マザコン君か」

クロロ 「アル、収集には協力はする。例の説明だけは、先にさせてくれ。」

アル 「契約だからな、いいよ。だが、短めで頼むよ。」

クロロ 「ああ」

クロロ 「まず、初めての者がいるから自己紹介するね。
僕は、時空管理局・時元航行艦・アースラ所属、クロロ・ハラオウ
ン執務官だ。」

クロロ 「第一級搜索指定遺失物・ロストロギア、「闇の書」の
破壊協力を管理局代表としてお礼を言う。」
クロロ 「ありがとう。」

クロロは、頭を下げた。

はやて 「破壊で、どう言うこと？」

シグナム 「破壊などは、させん。」

ヴィータ 「テメーら、管理局は自分勝手らしいな。」

アル 「ああ」

フェイト 「やっぱりKY君だ。」

そこに、デカイモニターが現れた。

リンディ 「アル君、皆さん。ごめんなさいね。」

リンディ 「クロロ、後でお話があります（説教）。さっさと、
貴方の仕事しなさい。」

クロロ 「わか・・・」

クロロが、言いかけた瞬間にシャマルが「旅の鏡」で、クロロのリンカーコアを取り出した。

シャマル 「リンカーコア収集、破壊なんてさせないもん。」

クロロ 「わあああああ……」

リンディ 「アル君、地球には結界は、すでに張ったわ。」
リンディ 「後、ユーノ君も転送しました。」

アル 「ありがとうございます。リンディさん、船は？」

リンディ 「言われた通りに待機しています。」

アル 「船と船の、合流地点の座標を、アルフ・シャマル・ザフィ
ーラ・ユーノに、送ってください。」

エイミィ 「わかりました。」

アル 「ユーノ、手はず通りで。」

ユーノ 「わかった。」

一方、クロロは収集が終わった同時に転送された。
それを見た、ユーノは結界を張った。

ユーノ 「アル、準備が終わったよ。」

アル 「わかった。」

アル 「シャル、残り何ページだ？」

シャル 「残りは20ページよ。」

アル 「なのはちゃん、フェイトから説明は聞いていると思うけど不測の事態が起きたら、僕の言うことをしてね。」

なのは 「わかったなの。」

アル 「フェイトとアリシアは、プレシアさんとね。」

フェイト 「うん」

アリシア 「わかったわ」

アル 「ヴォルケンリッターは、まず残りのページをお前達のリ

ンカーコアを収集させる。
完成したら、僕がお前達を回復させてやる。
そこまではいいか？」

シャマル 「はい」

ヴィータ 「おうよ」

シグナム 「ああ」

ザフィーラ 「ああ」

はやて 「なんとなくや」

ミナト 「はやてちゃん、ヴォルケンリッターの治療の為だよ。」

はやて 「了解や。」

アル 「そこまで、わかれば。後は、その時に指示を出すよ。
ここから、僕も何が起きるかわからんからね。」

アル 「みんな、手はず通りの位置についてね。」

リンディさん達も手はず通りで。」

フェイト 「位置に着いたよ。」

アリシア 「着いたよ。」

なのは 「着いたなの。」

プレシア 「準備万端よ。」

ユーノ 「着いたよ。」

リンディ 「わかりました。」

アル 「ミナト、始めてくれ。」

ミナト 「はい。王様。」

ミナトは、「夜天の書」をヴォルケンリッターの前に出した。

ミナト 「リンカーコア収集」

ヴォルケンリッターから、リンカーコアが出てきて収集しだした。

ミナト 「後少し。」

ミナト 「完成。」

その言葉を聞いたアルは、回復魔法をヴォルケンリッターにかけた。

決戦と治療（後編1）

完成した瞬間に、夜天の書が消えた。

ミナト 「我が妹よ、うまくやれよ。」

アル 「だな。」

夜天の書は、リインフォースの所にあった。

リインフォース 「王様達が、ここまでしてくれた。
王様の命令通り、うまくやります。
我が主の為に。」

リインフォースは、命令通りに「夜天の書」を新しい「夜天の書」にデータを移行しだした。
リインフォースは、作業しながらはやての前に行き。
はやてを、起こそうとしたら。
防御プログラムが起動した。

外では、はやてが光だした。

アル 「不測の事態宣言だ」

アル 「リインフォースが、はやてちゃんと合流するまで僕達は、外を守るよ。
ミナト、ユニゾンだ。」

ミナト 「はい。」

みんな 「了解。」

アル・ミナト 「ユニゾン・イン」

はやての姿が、初代の夜天の主になった。
その周りに、ヴォルケンリッターも現れた。

烈火の将「闇」 「我ら、闇の主の下に集いし騎士」
風の癒し手「闇」 「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」
蒼き狼「闇」 「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」
紅の鉄騎「闇」 「我らが主、闇の王、の下に」

シグナム 「初代の主だと。」

シャル 「これはまずいわね。」

アル 「まさに、予想外なのが出てきたな。」

ヴィータ 「俺達も、昔の姿だ。」

ザフィーラ 「闇？」

ミナト 「闇？ そういうことか。」

ミナト 「我が妹も、うまくやっています。」

ただ、予想外なことが起きたと考えれば。
王様、まずあのヴォルケンリッターから倒すのです。
その間、私たちが初代夜天の主と闘いましょう。」

アル 「わかった。」

アル 「シグナムは、自分と闘いだ。」

アル 「なのはちゃんは、闇ヴィータを頼むよ。」

アル 「ザフィーラとアルフは、闇ザフィーラを。」

アル 「シャルとヴィータで、闇シャルを。」

なのは 「わかったなの。」

シグナム 「ああ。」

シャル 「はい。」

ヴィータ 「おうよ。」

ザフィーラ 「こころえた。」

アルフ 「あいよ。」

アリシア 「何で、私とフェイトは無視なの？」

アル 「君達姉妹は、リンカーコア取り出せるの？」

アリシアとフェイトは、お互いの顔を見て納得した。

闇ヴィータとなのはが闘いを始めた。

なのはは、闇ヴィータに殴り飛ばされて、砂煙が上がった。
その砂煙の中からは、無傷で出てきた。

闇ヴィータ 「この悪魔め。」

なのは 「悪魔でいいよ。悪魔のやり方で聞いもらうもん。」

レイジングハート 「Buster mode・Drive
ignition」

レイジングハート 「Load cartridge」

レイジングハート 「Divine buster・Exte
nsion」

なのは 「デバインバスター・エクステンション。」

闇ヴィータに直撃し、勢いは止まらずその線上で闘いをしていた、闇シグナムにも直撃したのはの攻撃が爆発した。その攻撃で、みんなの動きが止まった。

ザフィーラとシャルだけは、自分達に攻撃をした。

シャルは、旅の鏡を使い闇シャルのリンカーコアを取り出した。ザフィーラは、鋼の軛を使い闇ザフィーラのリンカーコアを取り出した。

なのはの攻撃により、闇シグナムもリンカーコアが取り出された。

闇ヴィータは、再生プログラムにより復活した。

闇ヴィータは怒り、なのはに攻撃しようと動いた瞬間にバインドされた。

なのは 「あれえ〜。おかしいな〜。」

なのは 「もっと、がんばらないとだね。」

レイジングハート 「Y e s , m y m a s t e r .」

なのは 「全力全開。」

レイジングハート 「Starlight Breaker」

なのは 「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。」

なのは 「貫け！閃光！ スターライト・ブレイカー！」

なのはの攻撃は、闇ヴィータに向けて撃たれた。

アルと初代夜天の主との闘いは、初代夜天の主が優勢だったが。初代夜天の主は、なのはの攻撃を見て、アルと闘いを止め、転送魔法で闇ヴィータの前に行った。

リインフォース側

リインフォース 「防御プログラムの暴走だとにかく主を、起こさないと。」

リインフォース 「我が主。起きてください。」

リインフォース 「我が主。起きてください。」

リインフォース 「我が主。起きてください。」

はやて 「どないしたん、リインフォース？」

リインフォース 「我が主。起きてください。」

はやて 「うち、どないしたん？」

リインフォース 「ここは、夜天の書の中ですよ主。
夜天の書の完成した為、主はここに飛ばされました。
王様の命令により、夜天の書を新しい物に入れ替え作業してます。
けど外で、防御プログラムが暴走したいる為、作業ができないの
です。」

はやて 「まずは、落ち着こうか。
外は、アル君とみんながなんとかしてくれる。」

はやて 「うちと守護騎士達の治療なんやろ？」

リインフォース 「はい。王様の命令で作業してます。」

はやて 「ミナトさんから、聞いたで本当の夜天の主になるため
に完成させるって。」

うちに、夜天の主としてやることがあるんやろ。」

リインフォース 「はい。」

はやて 「やり方の説明してな。ここで失敗できんへんからな。」

リインフォース 「主の魔力を展開して、夜天の書に名前を登録してください。」

リインフォース 「後は、こちらで処理します。」

はやて 「わかったで。」

決戦と治療（後編2）

はやて 「よし、夜天の主として騎士として王様の命令に向け成功させるでえ。」

はやての足元に、ベルカ式魔法陣が光だした。

はやて 「まずは、暴走を止めるでえ。」

はやて 「止まって 止まって 止まって。」

時の庭園側

初代夜天の主は闇ヴィータの前で。

初代夜天の主は、「パンツァーガイスト」・「パンツァーシルト」を使い、なのはの攻撃を受け止めようとしたら。

はやての行動により、「パンツァーガイスト」・「パンツァーシルト」が、消えて初代夜天の主も動けなくなった。

スターライト ブレイカーは、初代夜天の主と闇ヴィータを攻撃しリンカーコアを取り出した。

その攻撃を受けた所、辺りで白い光があった。

光の中ではやてが。

はやて 「夜天の主の名において汝に名を贈る。強く支えるものの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

はやて 「管理者権限発動。」

はやて 「守護騎士システム再起動、リンカーコア修復 … おいで…私の騎士達。」

光の周りにヴォルケンリッターが現れた。

烈火の将「シグナム」 「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」
風の癒し手「シャマル」 「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」
蒼き狼「ザフィーラ」 「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」
紅の鉄騎「ヴィータ」 「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

はやて 「私の、杖と騎士甲冑を。」

リインフォース 「わかりました。我が主。」

はやて 「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース、セットアップ。」

はやては、騎士甲冑を纏った姿は初代夜天の主と一緒にだった。（原作と同じ）

はやての姿を見て、みんながはやての周りに集まった。

アースラー側

エイミィ 「何これ？、はやてちゃんと守護騎士達の魔力が先ほどより、はるかに違います。」
はやてちゃんの推定魔力値SSSオーバー、守護騎士達も推定魔力値SSです。」

リンディ 「アル君が、言ってたことが本当だったのね。」
ラルゴ・キール提督、それでは、これより不測の事態に向け警戒体制に入ります。」

ラルゴ・キール 「アル君を信じて、その時を待とう。」

部下 「了解。」

時の庭園側

アル 「まず、ヴォルケンリッターの治療は成功したな。」

リインフォース 「はい。王様。
後、命令の通り夜天の書もできました。」

アル 「本は、闇に逃げたか？」

リインフォース 「はい。」

アル 「まあ、予測はしていたよ。」

アル 「今から、あの暴走プログラムを破壊するよ。
作戦の説明するね。」

アル 「まあ、バリアは僕が破壊とダメージを入れるから。」

アル 「なのはちゃん・はやてちゃん・フェイトちゃん・アリシ
アちゃん・烈火の将・プレシアさんでバリアが無い時に、一斉攻撃
を手加減無しの全力全開で撃つてくれ。」

アル 「残りは転送組だ。」

アル 「風の癒し手は、一斉攻撃で露出したリンカーコアを捕ま
えて、転送組と転送してくれ。
その時、僕を気にせずに転送してくれ。」

アル 「転送したら、アースラーとさっき制圧した船が、アルカ
ンシエルで攻撃してくれる。」

アル 「紅の鉄騎は、風の癒し手を守れ。」

リンディ・ラルゴ 「アルカンシエルチャージ開始。」

部下 「了解。」

アル 「早くこれを倒して、幸せを取り戻そう。」

みんな 「はい。」

それを聞いたアルは、暴走プログラムに突っ込んだ。
アルは、全力で抜刀とバスターで攻撃して、バリア破壊とダメージ
を入れた。

フェイト・アリシア・プレシア 「雷光一閃・プラズマザンバー」

レイジングハート 「Starlight Breaker」
なのは 「スターライト」

烈火の将 「剣の騎士、シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン。
刃と連結刃に続く、もう一つの姿」
レヴァンティン 「Bogentform」

レヴァンティン 「Sturm falken」
烈火の将 「シュツルムファルケン」

はやて 「響け終焉の笛、ラグナロク」

アルは、みんなに念話で。

アル 「タイミングを見て一斉攻撃してくれ。俺に構うなよ。」

フェイト・アリシア・プレシア・なのは・はやて・烈火の将 「
はい。信じてます。」

烈火の将 「翔けよ、隼」
フェイト・アリシア・プレシア・なのは・はやて 「ブレイカー」

大爆発が起き。シャマルが「旅の鏡」で見た。

シャマル 「リンカーコア露出。
リンカーコア捕まえた。」

転送組 「目標、宇宙空間アースラーに。」

転送組 「転送。」

暴走プログラムのリンカーコアとアルが転送される。

エイミィ・部下 「アルカンシエルパレル展開。」

部下X2 「アル君とコアの転送がきます。」

リンディ・ラルゴ 「ファイアリングロックシステム オン。」

リンディ・ラルゴが鍵を入れた。

リンディ・ラルゴ 「アルカンシエル発射」

リンディとラルゴ・キールは、鍵を回した。

アースラーからの、アルカンシエルは暴走プログラムのリンカーコアに当たり。

アルが、暴走プログラムから「闇の書（夜天の書から改変プログラムだけ）」を見つけ出し、制圧した船からのアルカンシエルに投げ

当てた。

アルも、アルカンシエルの攻撃を受けた。

アルは、ミナトがアルカンシエルの衝撃でダメージを受け、気を失ったミナトに回復魔法を掛け、自分も最後の力を使って、瞬間移動したところでアルも気を失った。

アルカンシエルの攻撃は大爆発した。（打ち上げ花火のように見え
た）

エイミィ・部下 「空間内、完全消滅。
物体・物質の反応まったくありません。」

リンディ 「警戒体制維持、空間内及び周辺を観測します。」

部下 「了解。」

エイミィ 「て、ことではやてちゃんの治療宜しくお願いします
プレシアさん。

他のみんなは、休んでて。」

治療の後は、温泉だ（前編）

プレシア 「そうね、はやてちゃん。」

はやて 「はい？」

プレシア 「貴女の治療をするから一緒に部屋に来てね。」

はやて 「はい。」

プレシア 「フェイトは、前に行った温泉に予約してくれるかしら？」

アルちゃんの、机の上に封筒があるからそれを持って行ってね。」

フェイト 「うん。」

アルフ 「私もついていくね。」

プレシア 「そうね。」

プレシア 「ユーノ君は、後三時間ぐらいはこの結界維持しててね。」

プレシア 「はやてちゃんの治療の為に作った。
アルちゃんの魔法「架設空間」治療バージョン、魔法の効果が三時間ぐらいらしいから。」

ユーノ 「あ はい。」

地球のアル家側

遙か時間が戻り、アル達が飛び立つ少し前。

アル家の庭に、二人がいた。心配しになって様子を見に来ていた。その二人は、アリサとすずかだった。

アルは、二人がいるのを気がつかずに結界を張った。誰か来たら、あとの説明するが嫌だったからだ。

アリサ 「何？」

すずか 「空が暗くなって、周りが静かになったね。」

アリサ 「一回、門の外に戻りましょう。」

すずか 「うん。」

二人は、門まで戻ったけど結界があるため外に出れなかったのだ。

アリサ 「何なのよ、これ？」

すずか 「アリサちゃん、少し落ち着こう。
とりあえず、アル君の家に行こう。」

アリサ 「そうね。」

アリサとすずかは、家に向かった。

アリサとすずかは、勝手に家に入ってロビーに向かった。

ロビーの手前でも、みんながいるのが見えた。

アリサとすずか目線

アル君とアル君の隣にいる女の人以外のみんなの足元が光り。
みんなが消えた。

女の人がアル君に抱きしめた？

今度は、アル君の服を掴んだ瞬間に消えた。

それを見た二人は、走ってロビーに入った。

すずか 「いないね。」

アリシア 「何なのよまったく。」

すずかは、携帯電話を出して誰かにメールをしようと見たら圏外だった。

すずか 「え 圏外？」

アリサも、それを見て自分の携帯電話を見て。

アリサ 「圏外だわ。」

アリサは、アルの家の電話も調べた。

アリサ 「反応が、まったくくない。」

アリサは、イライラしていた。

すずか 「アリサちゃん、落ち着こう。紅茶でも飲んでね。」

アリサ 「何で、紅茶があるの?」

すずか 「テーブルに、用意してあったよ。」

すずか 「これ飲んでから。
落ち着いたら、家の中探して見よう。」

アリサ 「わかったわよ。

すずかに真顔で言われるとね。こんな時だからこそ、なんだよね？」

すずか 「そうだよ。」

二人は、紅茶を飲んで落ち着いたので探しに向かった。

誰か居ないか部屋を探し周って。

時間を、アルが最後の力を使って瞬間移動する頃。

アリサとすずかは、架設空間の部屋で違和感を感じていた。

アリサ 「この部屋、何？」

すずか 「わからない。」

その時、アリサとすずかの前にアルとミナトが現れ、アルが血塗れで、ミナトは気絶していた。
いまだにアルは出血していた。

アリサ・すずか 「キヤーッ。」

叫んだ。

アリサとすずかは、出血を止めようと、タオルと手で押さえつけた。

その時、フェイトとアルフが転送魔法で、架設空間に現れた。

アリサ 「誰？」

すずか 「フェイトちゃん？」

フェイト 「え」

アルフ 「アルちゃん？」

フェイトは、状況を見て。

フェイト 「アルフは、薬をアリサとすずかは、そのまま押さえつけてて。」

アルフ 「わかった。」

フェイトは、なのは達に念話しようとしたけど繋がらなかった。

フェイトは、念話でアルフに。

フェイト 「アルフ、なのは達に念話が繋がらない。」

アルフ 「なら、リンディさんに連絡してなんとかならないかな

「？」

フェイト 「わかった。」

フェイトは、アルがリンディと通信に使っていたやつで通信しだした。

リンディ 「リンディです。」

フェイト 「フェイトです。少し頼みたいことがあるのですが？」

リンディ 「何かしら？」

フェイト 「この通信を、シャマルさんに繋いで欲しいのですが。」

横からアルフが。

アルフ 「フェイト、そんな言い方している時間がないんだ、リンディさん繋げ。」

リンディ 「できるけど何故？」

アルフは、通信機をアルの方に向けた。

アルフ 「時間がないんだ。」

リンディ 「わかったわ。直ぐに繋ぐわ。」

リンディは、時の庭園に繋いだ。

リンディ 「シャルさん、フェイトさんから通信よ。」

シャル 「はい。」

フェイト 「シャルさん、急いでこっちに来てください。」

モニターにアルの状況が見えるように話したから説明なし。

リインフォース 「あれは、風の癒し手よ王様の所に行くぞ。」

フェイト 「あと、アリシアも連れて来てください。」

シャル 「わかったわ。」

リインフォースは、転送魔法で、アリシアと風の癒し手を連れて移動した。

リインフォース達が転送魔法で、架設空間に現れた。

リインフォース 「風の癒し手は、御姉様の身体を使って移植しろ。

リンディさんあとで、デバイスの部品のデータを送るので集めてくれ、今日中に。」

横からマリーが現れ。

マリー 「私の方をお願いします。」

リンディ 「私にも、そんな許可する権限無いわよ。」

マリー 「三提督が、いるのを忘れてないですか？」

リンディ 「ああ。」

マリー 「今日中に集めて見せます。」

リインフォース 「頼む。」

アリシア 「アリサとすずかは、向こうに行こう、フェイトはアル君のお使い行ってきな。」

フェイト 「うん。」

アリシア 「話しはあとで、向こうに行って着替えてからね。」

アリサ 「わかったわ。」

すずか 「うん。」

アリシア 「シャマルさん、あとはお願いします。」

シャマル 「わかったわ。」

アリシア・フェイト・アリサ・アルフ・すずかは、架設空間から出て行きフェイト・アルフは、温泉宿に行った。
アリサ・すずかは風呂に連れて行き、入らせた。その間に、アリシアとフェイトの服を着替え用に用意した。

アリシア 「アリサ・すずか、着替え用意したからね。小さい時は言ってるね。この上に置いとくからね。」

アリサ 「わかったわ。ありがとうね。」

すずか 「アリシアちゃん、ありがとう。」

アリシア 「いいよ。」

治療の後は、温泉だ（中編）

アースラ側

リンディ 「アル君が、見つかって一安心だわ。」

エイミィ 「そうですね。アル君が、いなかったらこの事件は災厄だったはずですから。」

リンディ 「そうなのよね。」

ミゼット 「リンディ提督。」

リンディ 「はい。」

ミゼット 「こちらの艦で地球の周りを調べてきますね。
そろそろ、地球に張った結界が消えるだろうからね。
私達の仕事は、やらないとね。
契約違反になるからね。」

リンディ 「お願いします。」

エイミイ 「契約？」

リンディ 「アル君と三提督が、いくつかの契約しているのね。」

エイミイ 「破ると、どうなるんですか？」

リンディ 「アル君が、管理局に戦争するらしいの。」

リンディ 「はっきり言って、アル君一人で管理局とミットチル
ダーを、一人も残さず殺しそうだからね。」

リンディ 「三提督も私も、関係ない人を巻き込まないように、アル君が出した契約を結んだのよ。」

リンディ 「契約内容は、私にもほとんど知らないけどね。一方的な、内容でないことは確かな事よ。」

エイミィ 「管理局に、メリットは？」

リンディ 「それは、言えないのよね。」

リンディ 「ただ。この事件後、三提督とあらたな契約するみた
いなよね。」

地球側

リインフォース 「部品交換はこれだけだね。
このデータをマリーさんに送る。」

マリー 「ミナトさん、以上でいいですか？」

リインフォース 「そうです。あと、私は夜天の書の管制人格者
でリインフォースと言います。ミナトの妹になります。」

マリー 「これは、失礼しました。部品は、揃いしだい連絡します。」

シャマル 「リインフォース、布団を持って来て。もうすぐで終わるから。
場所は、アリシアちゃんに教え貰って。」

リインフォース 「わかった。」

リインフォースは、歩きながらアリシアに念話をした。

リインフォース 「アリシア様、布団はどこにありますか?。」

アリシア 「ん? リインフォースさん?。」

リインフォース 「はい。」

アリシア 「アリシアでいいよ。一緒に運ぶよ。」

アリシアは、リインフォースを探してから布団を取りに行き、布団を架設空間に運んだ。（二人分を）

アリシア 「シャマルさん、終わったらロビーにお茶を用意しますからね。」

シャマル 「わかったわ。アリシアちゃん、王様の着替え……」

シャマルが言いかけでアリシアが。

アリシア 「布団と一緒に持って来てますよ、アル君とミナトさんの。」

シャマル 「手術成功。あとは、着替えさせてこの中で安静させれば大丈夫です。」

アリシア 「みんなに、伝えてくるね。」

アリシアは、泣きながら知らせに行った。

アリシア 「リンディさん、アル君の治療成功したそうです。グスン。」

リンディ 「よかったわ。なのはさんの所に繋ぐね。」

アリシア 「ありがとうございます。」

アリシア 「なのは、母さん。グスン。グスン。アル君のグスン。
治療成功したそうです。グスン。」

アリシア 「アル君の為に油断しないで最後までやろうね。グ
スン。」

リンディ 「そうよね。」

なのは 「よかったなの。」

プレシア 「本当によかったわ。アリシアはアル君の身の周りを
してあげてね。
こちらは、母さんが代わりをするわ。」

アリシア 「うん。」

ユーノ 「よかった。」

ユーノ 「なら僕も、時間まで頑張るよ。
なのは、頼みがあるけどいい？」

なのは 「ユーノ君何？」

ユーノ 「時間まで、もちそうにないから、アルが教えてくれた切り札「魔法」を使うから。
僕の身体を頼むよ。多分、フェレットで倒れると思うから。」

なのは 「わかったなの。」

ユーノは、切り札を使った。

アリシアは、念話でフェイトとアルフに知らせた。

アリシア 「フェイト・アルフ グスン。」

フェイト 「何？」

アルフ 「どうしたの？」

アリシア 「アル君のグスン。手術グスン。グスン成功したってグスン。」

フェイト 「よかった。もうすぐ終わるから。全力で帰るね。」

アルフ 「よかった。よかった。」

アリシアは、アリサとすずかが風呂から上がりロビーにいてと思う

から知らせに行った。

アリシアの予想通り、ロビーにいた。

アリサ 「アリシア、ちゃんと説明してよね。」

すずか 「アリサちゃん、落ち着こう。でないと、教えてもらえないかもよ。」

アリサ 「う」

アリシア 「グスン。まずね。アル君は、手術グスン。成功したってグスン。」

すずか 「よかった。」
アリサ 「よかったわ。」

すずか 「アリシアちゃん、話しはあとでいいから、アル君の傍にいなよ。」

すずか 「アリサちゃんも、それでいいでしょ。」

アリサ 「ちゃんとあとで説明してよね。」

アリシア 「うん。ごめんね。」

治療の後は、温泉だ（後編）

アリシアは、アルの傍に行ったらリインフォースに。

リインフォース 「アリシア様、王様の替えの着替えが欲しいのですか？」

アリシア 「わかった。リインフォース、アリシアでいいからね。」

そう言いながら、着替えを取りに行った。

アリシアが、着替えを取りに行つて架設空間に戻ると、フェイトとアルフが帰つて来た。

フェイト 「ただいま。」

アルフ 「ただいま。」

アリシア 「お帰り。」

アリシア 「フェイト、ごめん。アリサとすずかにまだ説明してないのよ。」

アリシア 「フェイト、アル君の傍にいなよ。説明してくるね。」

フェイト 「アリシアが、傍にいなよ。説明は、私がしてくるね。」

フェイトは、アルフを連れてアリサとすずかがいるロビーに行った。

フェイトが、ロビーに入ると。

すずか 「アリサちゃん、何で落ち着いて話し聞けないの？」

アリサ 「ごめんなさい。」

すずか 「アリシアちゃんの、今の状況は説明してくれないよ。」

フェイト 「すずか、よくわかったね。」

フェイト 「確かに、今は全部は話せないけど。アル君が目覚ましたら、できるよ。」

すずか 「フェイトちゃん、それって？」

フェイト 「とりあえず、説明できるものはするよ。」

アリサ 「フェイト、とりあえずこの家に閉じ込められてるのはなぜ？」

フェイト 「詳しくは、今は無理だけど簡単に言えば誰も近づけさせない為かな。」

すずか 「じゃあ。出れるの？」

フェイト 「今は無理だけど、アル君しただよ。」

フェイト 「アル君は、なのは達が戻るまでに目を覚ますと私は思っているから。」

アリサ 「アル君の、あの怪我なんだからいつ目を覚ますかわからないじゃ？」

フェイト 「私達が現れた部屋は、特別でね時間が早いのね。」
フェイト 「だから、もうすぐあの部屋の時間で約一週間ぐらいになるよ。」

すずか 「あの部屋の、違和感はそれだったんだ。」

アリサ 「てか、なのはも一緒？」

フェイト 「うん。」
フェイト 「もうすぐ、帰ってくるよ。」

フェイト 「今は、それぐらいしか説明できないよ。」

時の庭園側

プレシア 「そろそろ時間かな？はやてちゃんを見てくるわね。」

なのは 「はいなの。」

シグナム 「ザフィーラ。」

ザフィーラ 「なんだ？」

シグナム 「主と一緒に、地球に戻ってくれるか？」

シグナム 「今から、管理局の応援してくる。私とヴィータであ
らかた叩けば管理局も、被害が少ないだろう。」

ザフィーラ 「心得た。」

シグナム 「ヴィータ、行くぞ。主と王様が、目を覚ました時に
片付いてないと無茶されるからな。」

ヴィータ 「わかった。王様には、俺達も治療してくれた。今、
それ使わないとだなあ。シグナム、奴ら邪魔になるよ。」

なのは 「シグナムさんとヴィータちゃんは出て待機してて。私
がリンディさんに説明しますから。」

シグナム 「頼んだ。ヴィータ行くぞ。」

ヴィータ 「おうよ。」

シグナムとヴィータは、宇宙空間に行った。

なのはは、通信でリンディに説明した。

なのはは、念話で。

なのは 「シグナムさん、撤退したら始めください。」

シグナム 「わかった。」

プレシアが、はやてを抱いて出てきた。それを、確認したユーノは倒れた（フェレットになって）。

なのは 「ユーノ君、お疲れ様。」

なのはは、ユーノを抱いてプレシアの傍に行った。ザファイラも近くに行った。

なのはは、通信で転送を頼んだ。

なのは達の足元が光、転送した。

地球側

なのは達が、帰って来る少し前にアルが目を覚まし。

アルは、アリシアとリインフォースに説明してもらった時に、
なのは達が、帰って来た。

アル 「お帰り。」

プレシア 「ただいま。」

なのは 「ただいま。気がついたんだね。」

アル 「少し前にね。」
アル 「そっちの状況を説明して欲しい。」

なのはとプレシアが説明が終わると、アルが次の指示を出した。

プレシアは、薬作り。
なのはとアリシアは、アリサとすずかの傍に。
リインフォースは、マリーから連絡来るまでアルの手伝い。

アルは、なのはとアリシアに支えられながらロビーに行った。

アル達が、ロビーに入ると。

フェイト 「ほらね。」

アルフ 「気がついたんだね。」

すずか 「本当に。」

アリサ 「フェイトの言ってた通りだ。」

アル 「まずは、すずかちゃんとアリサちゃん治療してくれてありがとう。」

アル 「この結界は、リンカーコアがないと入ることができないよ。」

フェイト 「なら?。」

なのは 「そうなの？」

アリシア 「やっぱり。」

すずか 「？」

アリサ 「わかるように説明しなさいよね。」

すずか 「アリサちゃん落ち着いて。」

アル 「まあ、アリサちゃんの言いたいこともわかるけど。
アリシア達だって、アリサちゃんとすずかちゃんがいる説明しない
といけないでしょう。」

アリサ 「そうだね。」

すずか 「アル君は、説明をどこまで教えてくれるの？」

アル 「時間くれるなら、全部だよ。」

リインフォース 「王様、薬ができましたのでお飲みください。」

アル 「ありがとう。後3人も起きたら飲ませといてね。」

リインフォース 「わかりました。王様。」

リインフォース 「アリシア様、お湯が欲しいのですが。」

アリシア 「わかった。こっちだよ。後、アリシアでいいよ。」

アリシアは、リインフォースを連れてロビーを出て行った。

アリサ 「何で、王様って言われるの？」

アル 「そのことはあとで。」

アルは、薬を飲み出した。

アル 「なら、ここから出れるのかだね。」

アリサ 「うん。」

アル 「今すぐは無理だ。今、治療している女の子の治療が終わると結界を解くよ。」

アル 「その子のことは、アリシア達に後で聞いてね。」

アル 「なぜ、結界に閉じ込められてるのは君達も魔法使いってことだよ。」

アル 「て、言っても覚醒はしてないのよ。」

なのは 「なら、結界にはいないはずなの。」

アル 「違ってるね、リンカーコアが有るかないかだから。」

なのは 「そっちな。」

すずか 「魔法使いってこと?。」

アル 「君達は、卵だけだね。
後、この家にいる者全員魔法使いだよ。」

アリサとすずかは、今のことを聞いて固まった。

アル 「なのはちゃんとフェイトで、ゆっくりでいいから気がついていたら説明してあげてね。後、口止めはしといてね。」

なのは 「わかったなの。」

フェイト 「うん。」

それから、なのは達に色々な話しや説明を聞いたアリサやすすかは、はやてが目を覚ましてから話しなどし、仲良しになったみたい。

リインフォースは、マリーから部品を受け取り、ミナトを直した。

ミナトが、残りの治療して、アルとミナトでシャマルにお話し（説教）をした。

宇宙空間も、あらかた落ち着いたのでから。
アルは、リンディに連絡をした。

キャラクター設定

八神 はやて

原作と同じ

魔法陣 ベルカ&mp・ミット

魔力 SSS

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル 夜天の書

リインフォース

原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 SSS

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル なし

ユニゾンデバイス

広域拡散型

シグナム「烈火の将」

原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 SS

魔法ランク なし

魔法変化 火

希少スキル なし

デバイス アームドデバイス

シャマル「風の癒し手」

原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 SSS

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル 旅の鏡

デバイス アームドデバイス

ヴィータ「紅の鉄騎」

原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 SS

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル なし

デバイス アームドデバイス

ザフィーラ「蒼き狼」

原作と同じ

魔法陣 ベルカ

魔力 SS

魔法ランク なし

魔法変化 なし

希少スキル なし

デバイス？

温泉で話し合い （会談）

アルは、結界を解き電話をしだした。

アルは、みんながいるロビーに行き。

アル 「明後日、温泉に行くよ。」

みんな 「はーい。」

アルは、通信を開きリンディに連絡した。

その日の朝、架設空間にリンディ・クロロ・三提督が転送してきた。

リインフォース 「局員が、来ました。」

アル 「わかった。ミナト、ロビーで待つように言って来てね。
リインフォースは、少し手伝ってくれる。」

ミナト・リインフォース 「わかりました。王様。」

ミナトは、リンディ達の所に行った。

アル 「リインフォース、上の棚の右側の白い箱、2つ下ろしてくれ。」

リインフォース 「わかりました。」

リインフォースは、言われた箱を下ろした。

アル 「ありがとう。」

アル 「ピンクが、リインフォースで、赤がミナトのだ。」

アル 「わからなかったら、シグナムに聞いてね。」

アル 「バスが来る前に着替えといてね。」

リインフォース 「わかりました。王様。」

リインフォースは、渡された物がよくわからないままシグナムの所に向かった。リインフォースは、念話でミナトに伝た。

アルは、色々な書類やデータをまとめていた「管理局用・温泉宿用・はやて用・アリサとすずか用」。

仮更衣室側

リインフォースとミナトは、シグナムの居る部屋に行き。

リインフォース 「烈火の将、王様からこれを渡されたんだが…。

何をすれば良いんだ？」

シグナム 「着替えれば良いんだが？」

シャル 「着替えが、わからないだよ。」

リインフォース 「王様から、わからないならシグナムに聞いてね
って言ってたからだ。」

ミナト 「後、王様からバスが来る前には着替えを済ませとけだそ
うだ。」

ミナトのその言葉を聞き、みんなが慌て着替えをして、リインフォ
ースとミナトの着替えを手伝った。

みんなが、着替えを終わった頃。

アルは、鞆に書類とお金を入れ、リンディ達の所に向かった。

アル 「やあ。」

リンディ 「おはようございます。大将殿。」

アル 「リンディさん、会談以外は、普通でお願いします。」

リンディ 「すみません。」

ミゼット 「私達も、本当に行ってもいいの？」

アル 「ああ。会談の部屋もって言うか宿を貸し切りにできた。」

アル 「もうすぐ、バスが来るはずだからゆっくりしてて。」

リンディ 「はい。」

アル 「あ　そうそう、クロロはこれ飲んどけ。リンカーコアの治療の薬だ。」

クロロは、大人しく薬を飲んだ。

クロロ 「これは、なんだ？」

アル 「薬だが？ 魔力を一時的に、活性化させリンカーコアの治療を早めているだけだ。」

リンディ 「凄い。」

そして、少しの間でバスが来た。（ロンドンバス）

アル達は、バスに乗り。温泉宿に向かった。

アルは、バスの中で部屋の割り当てを言った。

- 1、プレシア家族
- 2、なのは・アリサ・すずか
- 3、リンディ・クロロ・ミゼット
- 4、ラルゴ・レオーネ
- 5、はやて・ヴィータ・シグナム・シャマル
- 6、狼とユーノ
- 7、リインフォース・ミナト・僕

宿に着き。

会談の時間と部屋を知らせ、一旦解散した。

菊ノ間側

アルは、会談メンバーが来る前に準備してた。

レオーネ・ファイルス 「待たせたね。」
ミゼット・クローベル 「悪いわね。」
ラルゴ・キール 「すまぬ。」
リンディ 「お茶は、私が準備します。」

アル 「後は、はやて達か。」

アル 「あの子達が来る前に始めますか。」

アル 「猫達（リーゼ姉妹）の処分は、地球では死刑がでてる。」

リンディ 「提督も？」

アル 「猫だけね。」

アル 「はつきり言って、まだ死刑は早い。
だから、僕預かりにしたよ。猫達に更正のチャンスを与える為に。」

アル 「データの所に詳細を書いたから見といてくれ。」

リンディと三提督は、データを見始めた。

アル 「見ながらいいので。はやて達の資料についてだが、
この資料以外は、あの子達にはまだ話さないでくれ。」

アル 「資料以外は、違う場所に詳細としてデータを入れていくから後で見といてくれ。」

リンディ 「あの2人も？」

アル 「多分ね。三提督の方は、何か？」

ラルゴ 「この計画は、地球には、メリットが無いようだが？」

アル 「あの子達が、計画道りに行けば、あの子達が宇宙から地球を守るんですよ。」

ミゼット 「私は、計画には、賛成だわ。これを基準にして契約書を作るよ。」

レオーネ 「このデータは、人？」

アル 「どれかな？」

アルは、モニターを見て。

アル 「デバイスと人です。詳細の通りですので見つけしだい僕の方に連絡ください。」

三提督 「わかりました。」

アル 「リンディさん達は、この事件で刑期が減ったよ。クリスマスの翠屋での奉仕で終わりです。
今の残骸処理はして下さいね。再生されると被害予想できませんから。」

リンディ 「わかっています。」

アル 「後は、はやて達だけか。」

アルは、はやてに念話で早く来るように言った。

はやて・アリサ・すずかが来た。

アル 「なら最初は、はやてちゃんからね。」

はやて 「はい。」

アル 「まずは、資料ね。」

はやては、受け取った。

アル 「はやてちゃん、次はこれで合ってる？」

はやてに、封筒を見せた。

「海鳴大学病院

神経内科 石田幸恵先生殿

八神はやて様の治療について」

はやて 「合ってるよ。」

アル 「ならその手紙を先生に渡してね。」

アル 「資料に詳細を書いたから見といてね。」

はやて 「はい。」

はやては、資料を見て。

はやて 「わかったよ。」

アル 「後、この封筒は、病院の行った後に学校に持って行けば、来年から学校に行けるよ。」

アル 「後、この人達に聞きたいことある？」

はやて 「あの子達の罪は？」

リンディ 「それは、今から決めるからまだ質問には答えられないわ。」

はやて 「そうですか。」

アル 「管理局の方はね。地球の方での処分は無いけど書類は沢山サインをして欲しい。住民登録する為に（裏手続き）。」

はやて 「わかった。」

アル 「はやてちゃんは、終わりだよ。」

アル 「はやてちゃんは、なのは達の所に。」

はやて 「うん。」

はやては、返事をしてすぐに部屋を出た。

アリサ 「何か？」

リンディ 「あなた方は、アル君の質問に答えればいいのよ。私達は、立ち会い人よ。」

すずか 「わかりました。」

アリサ 「わかったわ。」

アル 「ミナト・リインフォース」

ミナト 「はい。」

リインフォース 「王様。何をすれば？」

アル 「簡単なことだよ。本を出せばいいだけよ。」

ミナトとリインフォースは、本を出した。

アル 「すずかちゃん、この本に似た物持っていない？」

すずか 「持つてはないけど、家系の資料で見たような？」

ミナト 「吸血鬼か。その探し方があったね。」

リインフォース 「すずかちゃんが、蒼天の王？」

アル 「そうみたいだね。資料に似た物がある訳だから。」

アリサ 「ちょっと、なんですすが吸血鬼なの知ってるのよ。」

アル 「初めて見た時から気づいていたよ。」

アル 「今の話はここだけだからね。本の行方は管理局と僕が探すから。それまで今まで通りに過ごしてね。」

すずか 「うん。」

アリサ 「てか、私は関係ないんじゃない？」

リインフォース 「蒼天の騎士？」

ミナト 「その可能性だ。」

アル 「2人は、魔導師なんけども、封印があるから、覚醒が起きないのよ。」

リンディ 「まあ、2人はまだ普通の生活をして欲しいてことよ。」

アル 「ゆつくり、で良いから自分達の状況把握して欲しい。」

アル 「なんか、混乱しているのは、僕なのか？」

ミナト 「そうですね。予想通りだったからです。（一番悪い予

想」

アル 「まあ、今日の会談はこれまでかな。」

リンディ 「ですね。今日は、簡単に説明して、明日から話合えばいいかと。」

アリサ 「今日だけでないの？」

リンディ 「今後のことも、あるから慎重に話をする為なのよ。」

アル 「で、ことで今日は、飯迄自由だからね。ミナトとはやてちゃんは、最初は風呂の時間は気をつけてね。」

ミナト 「わかっています。」

ミゼット 「なら、今日はここまで。」

アル以外は、部屋に行った。アルは、フロントに行った。

アル 「すみません。」

女将 「何か？」

アル 「いつもの人は？」

温泉で話し合い (アリシアの悩み)

女将 「支配人？」

アル 「かな？名前を知らないから。」

女将 「今、席を外れてますので、後程お部屋に行かせます。」

アル 「お願いします。」

アルは、部屋に戻り。

ミナト 「先程は、お疲れ様でした。」

リインフォース 「王様、2人の封印で魔術混合封印？」

ミナト 「詳しくは、診察してないからわからないわ。」

アル 「はやてちゃん達が風呂に行ってるよ。2人も行ってきた。風呂の時に診察して欲しいかな。気付かれないようにね。」

ミナト 「わかりました。王様。」

ミナト 「行ってきます。」
リインフォース 「行ってきます。」

アルは、明日以降の会談の資料を作り始めた。

アルは、明日の資料情報を整理を半分終えかけた時、部屋の扉が。

「コン　コン」

と鳴り。

???　「失礼します。」

と、2人入ってきた。

アルは、モニターを消して。

アル　「どうぞ。」

支配人　「失礼します。」

???　「本日は、我が宿を御利用有難うございます。」

私は、この宿の大女将です。

先程は、若女将が失礼を。」

アル 「??」

大女将 「アル様と女の子達に・・・」

アル 「げ!? 僕は、良いからあの子達は気おつけて欲しい。

アル 「ちなみに、誰に？」

大女将 「金髪で、前に見てない子かな？」

アル 「あら。」

支配人 「もしかして!？」

支配人 「まさか？」

アル 「貴方の考えている子かな？」

大女将 「誰なの？」

アル 「バニングス家の令嬢。」

支配人 「今回、月村家の令嬢もいらっしゃいます。」

大女将 「聞いてないよ？」

支配人 「当日迄、わからなかったんだけど……リスト欄には、書いてありましたよ。」

大女将 「とんでもないことに。」

アル 「まあ」
あの子達に、風呂上がりにもアイスでもサービスでもしたら？
そしたら、なんとかかとくよ。」

大女将 「有難うございます。」

支配人 「アイスクリームや飲み物はサービスさせていただきます。」

アル 「なら、そろそろ上がるはずだから、先にあの子達の機嫌
をとりに行こう。
女将は、居ない方がよいよ。」

アル 「大女将と支配人は、売店で待っててね。
書類とか用意してから、あの子達を連れて行きます。」

大女将・支配人 「有難うございます。お待ちしております。」

2人は、部屋を出てから直ぐ売店に向かった。

アルは、書類とか用意しながら、アリシアに念話をした。

アル 「アリシア。」

アリシア 「何？」

アル 「風呂入る前、何があった？」

アリシア 「まあ、私達も悪いかもしれないし？」

アリシア 「騒ぎすぎたかも。」

アル 「アリサは、どんな感じ？」

アリシア 「少しは、落ち着いたかな。」

アル 「なら、みんなで売店に来なよ。」

アリシア 「うん。わかった。」

アルは、準備が終わり売店に向かった。
アリシアは、みんなに。

アリシア 「ねえ。みんな。

今ね、アル君から念話が来てね、みんなで売店においでだって。」

アリサ 「便利ね。」

なのは 「にあははは。」

すずか 「でも、数人一緒に話しができないのもね?。」

リンディ 「できますよ。」

アル君は、アリサさんやすずかさんの気持ちを考えて、アリシアさんだけに話しかけたんだと思います。」

フェイト 「私も、そう思うよ。
いつもなら、アリシアと一緒に連絡してくれるもの。」

アリシア 「まあ、速く行こう。
とくに、はやてちゃんは速く行かないと。怒られるよ。」

はやて 「なんで？」

リインフォース 「あ。」

ミナト 「しまった。
ごめんなさい。はやてちゃん、速く上がろう。」

はやて 「だから、なんで？」

アリシア 「アル君に、最初になんて言われた？」

はやて 「時間は短めに？」

ミナト 「王様の時間設定より、長く入ってます。」

アリシア 「わかってないね。私も治療されているからわかるんだけど。」

アル君の治療は少し長く入っていても命に危険がないから自分で調整しないと。」

本当に命無くなるよ。」

リインフォース 「アリシア様の、言われた通りですよ主。」

ミナト 「風の癒し手よ。」

シャマル 「何？」

ミナト 「王様が、本気で怒るとどうなるかは、貴女なら判るわ

よね？体験した貴女ならね。」

シグナム 「おい！？ シャマル？」

はやて 「どないしたん？」

シグナム 「気を失っています。」

はやて 「何で？」

ヴィータ 「そろそろ ミナトが言った回答だよ。」

リインフォース 「早く王様の所へ。
風の癒し手は、その椅子に置いといて早く上がろう。」

みんな 「だね。」

はやては、納得しないまま。強制的に連れて行かれた。

アリシア 「はやてちゃん、お風呂は最初は数回に分けて入れば良いから。」

はやて 「みんなに・・・」

なのは 「はやてちゃん、そこは違うよ。
温泉とお風呂は、違うよ。」

すずか 「なのはちゃん、余計にわかりにくいよそれじゃ。
はやてちゃんは、何回も入るのに迷惑かかるから、長く入っていたのよね？」

はやて 「なんで、わかったん？」

アリシア 「最低でも、私とミナトとリインフォースははやてちゃんに付き合うよ。」

はやて 「ありがとうな。」

ミナト 「私は、ある意味。
検査報告も兼ねてるから、数回に分けて入れれば良いからね。」

はやて 「みんな、ごめんな。
逆に気をつかわせたね。」

女の子達は、売店に着くとアルに怒られた。

それは、風呂から出てから30分以上も待たせたからだ。

アルは、アリサとすずかに少し話しをして問題解決にさせた。

アルは、支配人と一緒に別室に向かい、話しと支払いをしてお風呂に入り、部屋でくつろぎながら明日のデータを作っていた。

ミナトから念話が来た。

383

ミナト 「王様、御飯だそうです。王様以外は、揃ってますから。」

アル 「先に食べていて、良いからね。」

ミナト 「王様が、来るまで食べないと思いますよ。
なるべく早く来て下さい。」

アル 「わかったよ。」

アルは、明日の会談の時間を調べコピーしてからみんなの所に行った。

着くとアルは、みんなに紙を配り。

アル 「早く食べないと冷めるよ。」

みんなは、アルの言葉を聞いて食べ始めた。

アリシアから念話が来て、話があるみたいだから、食後部屋に来るように言った。

アリシアが部屋に来てから。

アリシア 「アル君、私…」

アル 「なあ、アリシア。」

アリシア 「何？」

アル 「魔力の差を感じ始めたのか？」

アリシア 「うん。どうして？わかったの？」

アル 「その前にさあ、アリシアは死ぬ前の記憶はあるか？」

アリシア 「全部では無いけどあるよ。」

アル 「なら、魔法使えた？」

アリシア 「あ！？」

アル 「わかった？」

アリシア 「母さんが、私には資質が無いって聞いたような？あるような？」

アリシア 「あれ！？ なぜ、今は使えるの？」

アル 「それはね、生き返させる為の条件が幾つかあるから。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5201m/>

魔法少女リリカルなのは 不幸な転生者

2011年9月10日02時50分発行